

253/5

新井石禪述



曹洞宗義大綱

鴻盟社

明治
45. 6. 6
内交

はしかき

新井石禪老師、昨夏某地の講習會に於て講演せられたるもの、地方の篤志者によりて『曹洞宗宗義之大要』と題して刊行せらる、しかも僻遠の地天下に普及するの便に乏し候、太仙師之を遺憾とし本社に之が再刊を懇願せられ、發行者に於てもまた快諾の意を表せらる、こゝに於て全編總ふりがな附とし齧頭に小標題を掲げ装幀を新しし『曹洞宗義大綱』と題して刊行するに至る、新井老師南船北馬些の寧日無く、親しく慈愼を窺ふの暇無く事多く予の専斷にあり、こゝに深く老師の海容を仰ぐ。

鴻盟社編輯局に於て

峰 立 光 識

明治壬子初夏

曹洞宗義大綱目次

緒言

禪の傳來……………一

第一章 總論……………五

一 禪の意義……………五

靜慮の意義。禪の消極的方面。禪の積極的方面。太田道灌の參禪。瑞巖主人公の話。道灌鐘聲に開悟す

二 三學一如の禪……………一三

戒の意義。定の意義。西行法師の人格。慧の意義。大智禪師の禪機。三學の相關

第二章 禪の本領……………三一

心の意義。默照禪は禪の正門。看話禪の必要。看話禪の弊。誤られたる禪。頸長の長四郎と禪僧。禪僧栢樹に化す。禪僧變化術を授く。長四郎の悔悟。長四郎最後の誓願。税所篤

子の孝貞。禪の呼吸法と國民の健康。一茶の超脱。名譽黄金以上の理想。信仰と家庭。惡平等を誡む。威儀即佛法の教訓。天地同根萬物一體の觀念。悟と三徳

第三章 禪の實踐道徳

一 禪と戒法との關係 七〇

自律的と他律的と。通戒と別戒。十六條戒の大別

二 信 仰 門 八〇

主觀的信仰。客觀的信仰。信仰の標準。佛。法。僧。信仰と人生

三 誓 願 門 九四

止惡。作善。利生。平常心是れ道の教訓

四 行 持 門 一〇三

四大原則。懺悔滅罪。發願利生。行持報恩。受戒入位。護生行。知足行。貞操行。實語行。明慧行。愛語行。恭謙行。布施行。安忍行。正信行

目次終

曹洞宗義大綱

新井石禪述

緒 言

曹洞宗といふ宗旨は一體何んであるかと云ふに曹洞宗は即ち禪宗であります、その禪宗といふのは達磨大師を支那の祖師と致しまして夫れから今日まで非常に發達致した宗旨である、其禪宗が色々の宗派に別れまして支那では五家七宗と申して都合七通りに宗派が別れて居ります、所が其中に於て日本に傳つて參つたと云ふものは曹洞宗と臨濟宗何れも本は同じい事である、日蓮宗杯て宗派が別れて居るのは法華經の取扱ひ方が違つて居る爲めに宗派が別れたので有るが禪宗に於て宗派が別れて居るのは然ら云ふ意味で無い、臨濟宗と曹洞宗との間に於て毛筋程も違つたとは無いのである、然らば何故宗派が別れたかと云ふに同宗の祖師方の中に於て勝れた御方が有つて時世に應じて禪の教を解り易く施された、其施しぶりが違つて居る、ズット氣高くとまつた施

した方もあれば、繞路と申して廻り遠くどのやうな人にも解り易く呑込み易い様に
して宗旨をお弘めに成つた方もある、又同じ向上の氣高い所から教へるにしても山の
頂上に坐り込んで居てサア來いと云つて來た者丈を接得すると云ふ様な教へ方もある
又大勢の中に飛込んで往て簡潔にして禪の妙味を傳へると云ふ教方も有ります、夫々
の特色が在つて何れも一段勝れた御方々ばかりである、私は斯の方が好い、私は斯
う云ふのが好いと法孫の人々が各々自分に信ずるも方の家風を追慕した餘り、臨濟曹
洞と云ふ宗名が出來たのである、今日に於ては實は然う云ふ宗名を存して置く必要は
無いのである、ナゼかと云ふと此日本と云ふ國は非常に物を能く消化させる力を持つ
て居る國で有ります、例へば御維新以後西洋の文物が日本に輸入されて今日では郵便
電信より汽車に汽船に、剩へ飛行機迄も出來て居ると云ふ位で、西洋的の物は多く這
入込んで居る、建築でも煉瓦作り或は石造なんかと云ふやうに昔の日本と今日の日本
とは形の上では非常に變つて居りますが、併し其精神に至つては日本人は中々さう西
洋臭くはならぬのであります、向ふの材料を以て來て日本魂を入れて具合よく調和

させてしまふ、丁度日本は世界の胃の腑の様なもの、世界中の美味を集めて日本の胃
の腑に入れ堅い物でも軟い物でも能く調和して肉を拵へる、即ち文明の肉を造つて
行く、日本は然う云ふ國柄である、況んや釋迦牟尼如來が御説き下された佛教は決し
て二た通り三通り有るもので有りませんから、希ふ所は唯今十三宗五十餘派と云ふ多
くの宗派が日本に在るが、此十三宗五十餘派の宗旨を打して一團と爲して日本的一佛
教に消化してゆきたいので有ります、併し夫は仲々數百年の久しき以前より宗派が出
來て居るので有るから形の上の統一は容易に出來ますまいが、宗義といふ佛教の教義
の上から見ると皆な統一せられてゆくのである、私は其意味を以てお話を申上げる
考で有るが、一言にして申せば臨濟曹洞の宗義の統一ばかりでなく真宗とか日蓮宗
とか淨土宗眞言宗と云ふ様な變つた宗旨が有りましたも禪宗と比較上少しも違はない
と云ふのが、佛教の精神である、是れは結論であるが先づ最初に之れだけ申上げて置
きます。

大體佛教は一佛教で決して變りはありませんが唯だ其同一佛教の中に於て實際に吾々

が教理を研究して夫を諦め、又悟を開いてゆく上の方法に於て、其人に依り、其時に依り、其場合に依て、形を異にしてゆく、夫が爲めに佛様を拜み御念佛を唱ふるもあれば、坐り込んでゆく坐禪の法も出来て来たのである、其中に於て私は曹洞宗の坐禪のことを主として御話を考へてあります。

第一章 總論

一 禪の意義

義靜慮の意

先づ禪と云ふとを一つ御承知を願はんければならぬ、禪とは印度の語で詳しくは禪那と云ひます、支那に翻譯して靜慮即ち靜に慮ると云ふ、お互の精神を靜めてゆくと云ふのが靜であります、慮とは思ひ量つてゆくのであるから道を研究してゆく之が慮の字の意味になる、お互の心を二つに養つてゆく、一面に於ては自分の心の内から現はれて来る所の諸の妄念を抑える、之を不動の精神と云ひます、近世の聖人も云はれて居る彼の二宮尊徳翁の如きは非常な佛敎信者で然も曹洞宗であります、唯今其寺も現存して居ります、二宮先生は常に不動明王の像を掲げて信仰して居られた、或る人が二宮翁にお尋ねをした、お釋迦様でも御信仰になるか阿彌陀様でも御信仰になるかと思ひの外一種變つた不動様を御信仰になると云ふのは何う云ふ譯で有りますかと云ふと、二宮先生の答が面白い、我れ嘗て小田原侯の命を奉じて下野國ものものと

云ふ所に行きて萬事の改良を圖つたのであるが、此土地は疲弊して住民は到底其所に居堪へられぬから四方に散亂して妻子兄弟各々離れ〜となり、見渡す限りの田地は草茫茫と蔽ひ茂つて見るも淺ましい様な状態に成つて居る、然う云ふ場所へ參つて亂れ切つたる人民を相手に土地の改良を圖ると云ふは容易な事業でない、苟も小田原侯の親任を受けて參つた以上は縦ひ飲む物を飲まず食ふ物を食はずにどんな艱難辛苦をしても斷じて此土地は動くまい、苦しいから逃げ出さう辛いから他へ行かうと云ふ様な考では到底此土地の開拓は出來ないから、ヨシヤ身體は粉な微塵に碎けやうとも誓つて此所は動かぬと云ふ決心をした、それが動かざるを尊ぶ即ち不動尊である、今日吾々の精神は必ず不動尊でなければならぬ、不動尊は夏でも焔々たる火を負つてござるがピクとも仕ない、大磐石の上に坐つて動かざる決心が無ければ事業を成し遂げると云ふとは出來ないと答へられたのである、二宮翁は不動尊を自分の腹の中に收めて大事業を成功したのであります。

吾々は様々な迷の心が起る、其迷ひの心をピタリと抑えてゆく之が坐禪の一つの方法

禪の消極的方面

て静と云ふ之は禪の消極的作用である、坐禪をすると自ら心が静まる、先づ坐禪の形は兩足を組んで脊梁骨を真直ぐにして手に定印を結びます、ナゼ斯う云ふ事をする必要があるかと云ふと、斯うすれば身體の調和が出来る、手を結んだなら下腹を前の方へ突き出す様にして息を深く吸ふ、臍から二寸位下を丹田と云ふ、所謂下腹部に息を吸ひ込んで之を吐出す、呼吸する加減は、一寸深呼吸の様子と同じ事である、眼は初めの内は開かぬ方が宜しいかも知れぬ、坐つて向ふ四尺位の先を見る位の態度にして、さうして色々思つて居つた心をピタリと止めてしまふ、而して十分間も二十分間も坐をして居ると恰も虚空の上にも坐つて居るが如き觀念に成つて身心の束縛を離れた様な心地がする、之が静と云ふ所になつた現象です、併し、唯、心を静めると云ふ丈ではいかぬから其次には慮りと云つて積極的に宇宙の眞理を慮るのである即ち充分に心を静めて愈々精神が平かに成つて恰も磨き上げたる鏡の様に成つた所で眞理と云ふものが明に寫る斯様に自分の心をジツト静めて見ると成程之が悟であるかといふ悟らしい眞理らしいものが自然に吾々の心に現はれる、尤も自然に現はれるの

禪の積極的方面

を待つとの出来ない場合には或る一種の問題について工夫してゆく、之を公案といふ
其事は後に解り易く申上げる積りである、凡て禪宗では、何か一つの研究すべき問題
を授ける方法があります、之が必ずしも曹洞宗の禪の眞面目では無いが、一種の方便と
して授ける、例へば太田道灌入道の如きは主人公の話と云ふを授つた、此人は唯今では
皇居に成つて居る江戸城を、一番初めに築いた足利時代の大人物と云はれた太田持資
と云ふ人である、此人は非常に風流を好むだ歌人であつた、未だ歌の趣味を知らなかつ
た時に箱根の山へ狩りに行いた、其時俄に雨に降られて篋を借らうと云ふので或る人
家を訪うた、所が一人の若い女が居つたから氣の毒であるが篋を貸して貰ひたいと云
ふと、その女が黙つて奥から盆の上へ山吹の花を一輪載せて来た、何んだ篋を貸して
呉れと云ふに山吹の花を持つて来た、此女は耳聾か知らんと斯う思ふて立戻らうとし
て、從者に向つてあれは馬鹿な女だなア乃公の云ふとが分からぬと見ると云ふと、從
者があれは篋が有りませんと云ふと答へてすといつた、(道灌) 山吹の花を持って来て篋
がないとは可笑しいでは無いか、(從者) 夫は昔の歌が有ります、「七重八重花は咲けど

も山吹のみのひとつだになさぞかなしき」私の所には篋を持ちませんと口で云ふの
が愧かしいと云ふので一輪の山吹の花を出したのですと云ふと道灌入道汗を出した、
それぢや乃公の方が餘程馬鹿ぢやと、斯う云つてそれから歌と云ふものは實に味ひ深
いものだと云ふ事を考へて、後には歌の名人と成つて「いそがずば濡れさらまじを旅
人のあとより霽る、野路の村雨」と斯う云ふ歌も詠れたのである、此人が江戸表に於て
芝の青松寺の雲岡和尚と云ふ人を訪ふて主人公といふ公案を授つた、其の公案は昔し
瑞巖和尚といふ人が在つて一人で方丈の座敷に居つて大きな聲をして主人公々々と
云ふて又自分で諾々と返辭をして居つた、古人は殆ど命を擲つて修行をしたもので有
るから、然ういふ風にやつて居た、お互の心が即ち主人公で智慧でも意志でも情でも
皆な御家來である、一人の主人公が命令をすると番頭さんから下女下男まで働く、其
主人公の命令が公明正大であれば何百の人も手足を使ふ如くに動きますが、主人公が
茫然すると却々動かぬ、下女も下男も何んにもきかぬ様になる、先年亡くなられた谷
干城の奥さんは熊子さんと申して、熊本籠城の際は非常に骨を折つたと云ふ賢婦であ

るが、私は何回も面會致した、彼の人云はれた辭に感心をした、妾は教育も何にも無い人間であるが、谷干城の家へ嫁しづいてから今日に至る迄朝下女下男等の召使の者を起すのに自分が寝て居つて起したとは無い、病氣の時は特別、平常は寝て居つて起すと仲々起きませぬ、ウン／＼などと云つてチットモ起きない、自分が先きに起きてサア起きなさいよと小さいな聲で起すと、ナイト向の神經に通じて直ぐに起きる、自分が寝て居つて起すと仲々起きない、主人公がズルイと皆云ふ事をさかないと云はれたが、實に然うて有る、お互の主人公が鞏固でないも手でも足でも思ふ様にさかない、之を今日の心理學上の語から云ふと意志の活動といふ主人公の働きが薄弱である、一番勉強を仕やうかと思ふても暑いから御免を蒙ると云ふやうて、仲々手も足も動かぬ、何の暑い位はと云ふ勇氣が有ると手足も命令通りに動く、サテ其主人公とはどんなものかと云ふと西洋の心理學者杯は心の現象を研究して居る、例へば此水瓶の中には何が在るか分らぬが、斯うして注いで見ると水が出る、口から出た上の働さだけ研究して居る、此根源は何んで有るか分らぬ、近頃の靈魂學上では心に形が有る

なんと云ふが、之も假定説で、此上何十段も進んで來なければ證明は出來ない、心と云ふ問題は容易に解決は出來ない、主人公／＼ハイ／＼此主人公は畢竟どんなもので有らうかと云ふとを雲岡禪師から道灌入道は授けられたから一生懸命に成つて坐禪をして工夫をしたが仲々解らぬ、

心にも及ばぬものが何にかあると心に問へば心なりけり

一番世の中の不思議は何かと云ふと即ち心であると云ふ意味である、其主人公と云ふ心の本體を見つけたいと頻りに研究して遂に悟を開いた、悟と云ふものは妙な機會に於て開くもので、或時道中を歩いて居る中に西國順禮と伴連れになつた、(道灌) お前さんは何所からお出でた、(順禮) 私は京都の者である、(道灌) 京都の景色と關東の景色と何うだ、(順禮) 京都は實に手細工の様な山水が有つて奇麗であるが、關東へ行くと一望百里、沃野千里と云ふ姿で端ても見えない、茫々たる廣い野原で、遙に西の空を仰ぐと巍然として富士山が聳えて居る、北に連つては日光山二荒山が中天に高く聳えて居る、東の方には筑波山を望む、水利には隅田川利根川と云ふ様な大河が滔々

として流れて居る、關東の景色は又格別で有りますといふ、(道灌) お前方は斯うして日本中歩いて居るが別に變つた所があるか、(順禮) 夫れは何所へ往つても變つて居ります山へ這入れば山の景色海へ出れば海の景色があつて各々特色を發揮して居ります、(道灌) 然うだらう之が差別の世界と云つて世の中は千差萬別であるから何所へ往つても一本の草にも各々光明が輝いて居るものだと云つて話をした、其の中に何所から打出したか山寺の鐘の音がゴーンと響いた、彼の順禮が旦那様あの夕暮の鐘の音だけは何所へ往つても同じですと云つた、其時に太田道灌は悟つた、世の中は差別の世界であるから各々其特色を具へて居るが其中に於て統一した一つの精神がある、自分の心ばかりでない自分の心を究めて見ると天地間がタツタ一つの大神で靈妙不思議に活動して居る、其活動して居る靈妙の本體が解らぬ、解らんから基督教徒では天帝といふものを設けて本體を立て、居る、併し天帝といふ者と萬物とに能造所造の區別がある、即ち造る物と造られた物との二つある、してみれば大工さんと品物との關係である、天帝と拵へられた吾々の體とが別々であるといふ事は哲學上の原理に合はぬ

ことになる、佛敎は唯心論であるから吾々の方寸の内には此天地間の萬物が一體であるといふが佛敎の主張であつて、釋尊の仰せられた有情非情同時成道で、野山に在る草木迄が佛であるから、天地間が一つの佛の大明である、其大明を信仰の上から認めるのが淨土眞宗の安心で、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と云ふ、所が夫を敎へて自分の精神の妄想を破つて吾々の方寸の内には其大明を認めて輝かして行く、之が禪宗の悟て之が慮るといふ禪の積極的作用である。

二 三 學 一 如 の 禪

是に於いて佛敎におきましては戒、定、慧の三學といふとを立てます、何うしても此三つの學問が無ければならぬ。

(一) 戒とは防非止惡の義で、非を防ぎて惡を止める、吾々が凡ての働きの上に於て惡い事を仕ないとして意志に制裁を加へて行く、是は最も必要などである、例へば村には村の掟がある、町には町の掟がある、國には國の法律といふものが設けてある、

それで佛様は三つの學問の中に第一に戒と云ふ掟をお説きになつた、此防非止惡と云ふ事を解り易く云へば吾々の修身上の教、之を戒といふのである。

(二) 定とは禪定、即ち坐禪のことである、前に申した如く調心息妄をいふ、即ち調心とは心を調へる法です、佛法は丸で枯木の様になつてしまへと云ふのぢや有りませぬ、彼の人は達磨さんの様に頭を撲られても痛いとも何んとも云はぬ感心だと、それでは薩張りつまらぬ、さういふ風に佛法を修行するのは死骸を造るやうなものだ、其邊が六ヶしい所です、大燈國師といふ御方の歌に

坐禪せば四條五條の橋の上行き來の人を深山木に見て

吾々が坐禪をすると京都の四條五條の賑かな橋の上に居つて大勢の人が行きたり來たりするが、丸で林の中に居る様な心地がして少しも心が動かぬと云ふことです、どうか然ら成りたいです、併し乍ら唯見る人、聞く人が林の様に成つたと云ふ事で、唯自分の心が動かぬと云ふ一方であつたならば其人は活動は出來ない、親を見ても有り難いと思ふ心が起らず、小供の顔が見えても可愛いといふ心も起らぬ、其代りお金を見

ても欲しいと云ふ了簡も起らぬ、惡口を聞いても腹が立たぬので、都合が好いやうだが夫ればかりでは枯木死灰と云つて枯木の様な温まりの無い人間を作る、無我と云つても片寄つた無我ではいかない、西行法師杯は立派な人ではあるが皆があゝいふ風に成つたら大變である、西行法師が鎌倉の陣中で頼朝公の面前に於て御家來の人々を集めて滔々と軍學の講義をした、西行法師は固より雲水の身であるから金の欲望も有るまゝに依つて御禮として銀で造つた猫を一匹頼朝公が下された、之れは私が始終可愛がつて居る猫だが御禮として差し上げるといふて西行法師に下さつた、西行法師は仕方が無い、實に有り難迷惑である、サア厄介だ、道中する者は斯んな重い物を貰つて始末がつかぬ、困つたものと思ひ乍ら、鎌倉を出て由井ヶ濱へまで來ると、大勢の漁夫の子が集つて、和尚さんが大層立派な猫を持つて居ると云つて後からついて來る、西行法師は此猫が欲しいなら呉れてやらうかと小供にいふと小供等喜んで和尚さん下さいと云ふから、西行法師は惜氣も無く頼朝公から貰つた銀の猫を漁夫の鼻垂れ小僧にやつてしまつて、ア、之れで好かつた荷物が輕くなつたと喜んで行かれたと云ふ事

である、何んとなく吾々は斯う云ふ話を聞きますと今日の名譽とか利益とか云ふ名利の巷にのみ心配して居る世の中に甘露水を一盃飲んだ心地がする、之も結構ではあるが人間がいつもそんな心持ではかり居ては又仕方がない、夏になつて氷水を飲んだら宜かつたと云ふが一年中氷水ぢやいかぬ、斯う云ふ風に浮世を離れると云ふ許りが佛法でない、吾々の心の本體を見附けたらば天地の道と吾々の心の徳が一致してゆくこと云ふ風にする、之を調心といふ、心を調へるとは例へば一軒の内て主人も家内も奉公人も皆ゴチャ／＼にするのでない、御主人は御主人、奉公人は奉公人で居つて皆な別々で、所謂、法、法位に住して柳は緑、花は紅、みな銘々の本位を守つて居る其儘が互に精神に統一が出来てゆく、之が調和である、お互も欲を捨てるばかりが調和で無い、欲もありち金も欲しいと云ふ心もあり、面白い物を見たい聞きたい心もある、斯様のものが能く調和して天地の道と一致すれば世の中の妨害をせずに此欲なるものが却て世の文明を進めてゆく、其欲が立派に家業を勵んでゆく、殖産興業に努力して行く、而して二十世紀の日本國民に愧ない動作が現はれてくる、そこで自然に悪い心

をも起さぬやうになる、

引かれなば悪しきみちにも入りぬらん心の駒にたづなゆるすな

油断をすると何所へ引き込まるか分らぬ、殊に青年時代の人扱は働き盛りで働く方面が多いただけそれだけ互の心を修める必要がある、之が妄を休むる定の意味であります。

慧の意義

(三) 慧は證理見性の意である、天地の道を諦らめ悟るのを見性と云ふ即ち互の主人公とは何物だと心を明らかにする之が見性である、所が禪とは何う云ふ形のものになるかと云ふと、禪は戒法の本になる、心が静つてゆきますと自ら平素の行ひが規則に契つてゆく、世間でも然うて有りませう、私は法律も知らない学校の教育も受けなると云ふ人で行ひの立派な人が有ります、未だ學ばずと云ふと雖ども我れは是れを學びたりと云はん、一つの眞の心と云ふものが具つてゆくと吾々の行ひが自然に孝行になり忠義になる、天地の大道に契ふやうになる。

彼の九州筑前の宗像郡竹丸村と云ふ所に正助といふ孝行人があつた、孝子傳にも出て

居ります、此正助は非常に佛教信者であつたといふ、所が平常の行ひが自然と道に契つてゆくから面白い、國の殿様が江戸表へ參勤交代の時分に土下座をしながら手を合せて涙を流して居つた、吾々人民の爲めに此暑いにも拘らず此寒いにも關らず遠方にまでお出でなさるは皆な國家人民を治める爲めの御艱難である、決して人の爲めてない、御殿様が江戸表にお出で下さるは私の爲めてあるといふ、正助は凡て然ういふ考である、正助には年老いた両親がある、或日下の關へ用事があつて出て行くに、父親が正助や今日は雨が降るかも知れぬに依て下駄を穿いて行けよと云ふと、傍らから母親が正助や今日はち天氣であるから草履を穿いて行けといふ、正助も困つた、草履を穿けば父の命令に背くことになり、下駄を穿けば、母の言附に對して濟まず、両親の云ふ事に反對する事は何うしても忍びない、両親の言附に背かぬが私の樂しみてあるからと云ふので、マ、ヨ斯うませうと、御苦勞千萬にも下の關迄片方の足には下駄を穿き、片方の足には草履を穿いて出掛けた、一寸聞くと馬鹿な様であるが、然うでない、自分はマウ己れを捨て、しまつて親の命に違はない程親に對して忠實であ

るからだ、唯親ばかりで無い、凡て自分がどんな氣高い理想を持つた立派な人でも法令であるとか若しくは村役場の命令であるとか云ふものに對しては自分の意見を主張せず上より降す命令の下には殆ど馬鹿に成つて頭を下げてゆく人と云ふ者は國家社會に忠實である、或る場合には負ける稽古が肝腎である、正助は負ける事が上手で有るのである、正助の妹が村内へ縁附いた、所が父親は此妹の顔を見るのが何によりの樂しみだと云ふから、正助は何うかお父さんを喜ばしたいと思ふてお天氣さへ好ければ五六町もある妹の所へ毎日お父さんを連れてゆく夫れて仕事に遅れるかといふに然うでない、人並勝れて餘計勉強する、或時妹の所へ行きて椽側で泣いて居る、妹が出て来て兄さん何所かお腹でも痛むのかと云ふと、(正助) ナニ腹は痛くはないが私は心配でならぬ、(妹) 何にが心配でありますのか、(正助) それは毎日斯うしてお父さんを負つて來るが近頃は何うもメツキりお父さんの軀が軽くなつた、これはお父さんの軀の肉が落ちたのであらうと思ふと何んとなく老い先きが短かうお成りなかつたかと思ふと悲しくてならぬ、之れについても兄弟心を合せて今迄よりも三層

倍も餘計孝行をせぬければならぬと云ふから、妹も共に涙を流して兄さんさうであります、妾も氣を附けますが何うか兄弟諸共に精々お父さんに御安心をさせ申しませうと云つた、何うで有りませうお父さんを負つてお父さんの目方が軽く成つたと云ふので自分が涙を流すと云ふのは、所謂父母の年は忘るべからず一度は以て喜び一度は以て悲むといふ、支那の聖人の教に識らずくの中に正助の心が契ふて居る、あんな正直な男でもチツトは胡魔化す根性があらうと云ふて村の若い衆が道路の真中に錢三貫文を投げて置いて置いて樹の蔭から之を見て居ると、正助は其所を通り掛つて喫驚りして三本の錢差しを手にとつた、此方からは斯うして眺めて居る正助は何うするか知らんと思ふと三本の錢差しを手には取つたが當り近所に誰も居ない、さうすると其錢を其所に置いて道路へ坐り込んだ、何うするかと見て居つた若い人達は正助が坐り込んだから弱つた、仕方がないから此方から聲を掛けて正助さんお前は何んだつてそんな所に坐つて居なさる、(正助)唯今私が此所へ参りましたら三本の錢が落ちて居ります、此所は本道でないから何れ捨てなされた人は村の方で有らうから取りに來られるだらう、

其間に烏にても取られちやならんと思ふて私は番をして居りますと云ふた、妙なものです、然う云ふ正直な親孝行の正助が有つた爲めに竹丸村と云ふ一小村に於て親孝行をして殿様より彰表された者が二十三人出來た、徳孤ならず必ず隣ありて、斯云ふやうに自分の精神が落着いて行けばする事爲す事が自然に道に契つて行く事は斯云ふものである、是れは最も吾々が注意すべき點で有らうと思ひます、それであるから今日坐禪をして自分の精神が奇麗になつて殆ど鏡の如くなる、之を日本流で云へば

神代とはふるし昔のことならず神神の代と知る人を神

と舍人親王が詠まれてある如く、天照大御神様が皇孫瓊々杵尊に鏡をお授けに成つて我が子孫たる者此鏡を以て吾れと思へと仰せられた、鏡は神に喩へて神の本體は正直である、鏡は吾々の腹の中にあるから其腹の中の鏡を充分に磨きあげてゆけば自然と道徳と戒法規律となつて現れてゆく、佛様から教を戴かないでも、識らずく帝の則に契ひ、佛様の戒法に契ひ世の道徳にも契ふてゆく事になる、禪は則ち戒を産み出す母である、坐禪をしてお互の心が清らかに成つてゆけば自然と自分の一舉一動の上

に戒法の徳が現れる、デあるから禪は戒法の本で、禪に依て心の説明が出来る、昔
 寒巖禪師と大智禪師と禪宗の問答をせられた事がある、寒巖禪師は後鳥羽天皇様の御
 子様であつて曹洞宗の御開山承陽大師の御弟子であると云ふのと、又徹通禪師のお弟
 子であると言ふ説もあるが、先づ年代の上から考へて見ると承陽大師のお弟子と云ふ
 説が正確らしい、此方は肥後の大慈寺と云ふ寺の御開山に成られた、其お弟子に大
 智と云ふ方があつた、尤も後には明峯と云ふお方の弟子に成られたが、始めは寒巖
 禪師のお弟子であつた、此人は仲々利根な性質で、子供の時からして衆人に勝れて居
 られた、八歳の時寒巖禪師の所へ母に連れられて来た、寒巖禪師の前に饅頭がある、
 坊やお前は幾歳か、(坊)八歳に成ります(禪師)名は何んといふか萬重と云ひます、
 禪師は萬重の前に饅頭があるから箸を以て饅頭を一つ挾んで出して「萬重饅頭を喫す
 る時如何」と、坊もマンヂウ之もマンヂウであるがマンヂウがマンヂウを食ふ時は何
 うするかと問はれると(萬重)子供ではあるが「大蛇の小蛇を呑むが如し」と答へた
 から之は利根な子だ小智慧が有るからと云ふので弟子と成られてから小智と名附けら

れると、(坊)小智は菩提を妨げるから宜しく大智と稱すべしと云つて小智ぢやいけま
 せん大智と名を附けて下されと請求して大智と改名して貰つた、此方は後に南朝の
 忠臣楠正成公を助けて尊氏の軍と戦ひたる菊地武時公の師匠に成つた人です、此大
 智禪師が未だ青年の時代に大慈寺の寒巖禪師の許に在つて修行中の事であるが、大慈
 寺には本堂の前に川が在つて其川を朝から晩まで渡船が通つて居る、或時寒巖禪師
 が大勢のお弟子達を前に置いて云はるゝには「彼の船を止め得る底の人有りや」と、此
 處に坐して居て彼の船をピタリと止める者があるか、船は動いて居る即ち人世の惜し
 い欲しいの様な船が動いて居る、順境逆境に在て色々の波に漂はされて居る、それ
 を止めるのが佛法の安心だから、此處に居て彼の舟を止める者があるかと仰しやると、
 傍に居つた十七八の大智和尚が黙つて立つた、何うするかと思ふと向ふの障子をピ
 シヤツとして知らん顔して居る、挨拶も何にも仕ない、船は止まつてしまつた、何
 人にも見えなくなつた、坐禪も丁度斯んな形です、向ふに氣に入らん人があれば其人
 を逐出してしまつてさうして自分が安心を仕やうとしてもさうは成らぬ、縦ひ百千万

境にどんな物が有つても自分の精神の障子をしめてしまつて、さうして自分が夫れに迷はんやうに成つて行けば一種の不動尊である、此所に於て寒巖禪師が「尙ほ手脚に涉ることあり」と仰せられて手足を動かして漸く船を止める様な悟はつまらんと云はれると、大智禪師がフツト斯う目をつぶつた、成程これぢや手も足も動かす必要はない、假令ひ世界中に百千万境が一時に現はれて来て吾々の身に迫るとも、お互の精神が堅固なる時は我れに於て何にかあらんと云ふ見識である、此人が終には大智禪師といふ大徳に成られたので有る、併しお互が今日心の動く場合には、行も禪、坐も禪、語も黙動靜體安然で、立て居ても、坐つて居ても、車に乗つても、汽車に乗つても、自分の精神が動かない、之が一種の坐禪である、今日の青年諸君の如きは、坐つて居つて坐禪するばかりでなく、立つて居て活動してゆきながら、活動其儘が禪定の状態とならねば修養上の根據にならんのである、お佛壇に向つた時は信心が起るが、佛壇を離れると信心がなくなる、そんな事では誠の信心にはならんので有る、彼の熊谷直實は、法然上人の許を離れて鎌倉へ下る時分に、西の方を後ろにしては勿體ないといつて後向

さに馬に乗つたといふが、併し今日のお互は、その模擬を爲さいといふのではない、唯だ仕事をする時はクルクル廻りをして獨樂のやうにしても、心といふ心棒だけがキチンと動かぬ、心棒だけは心の主人公で、神を敬ひ、佛を信じ、天皇陛下の詔を頭に戴くといふ大磐石の精神が在つたならばクルクル廻りをする儘が、氏神さまに後ろを向けない、佛様を後に仕ない、之が本當の信仰であります、古歌に「極樂は西にもあれば東にもきた道さがせみんなみにある」、浄土真宗の話と反對ではない、光明遍照十方世界で有るから吾々が日用に於ける起居動作が總て阿彌陀如來の光明の中の仕事であるといふ所に至つて始めてお互の修養の基礎といふものが鞏固に成つてゆくのである然うしてそれと同時に吾々の行ひが手の先から足の爪先迄に天地の道といふ有り難い道が現はれる。

「斯の道は皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所、之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らず」といふが、陛下の詔である、實に古今東西に通じて居る、併し道はどんなものか之が道だといふて形に現はす事は出来ぬ、道は元來無形だ、

無形では有るが、併し親切なる誠が親に對しては孝となり、君に對しては忠となり、夫婦の間に在つては和合の徳となる、夫婦の間に機嫌よくして心嬉しく働いてゆけば相互の間に和合といふ徳が自然に現はれる、其所に至れば手からも足からも顔からも唇からも和合の徳が現はれて来る、それと同じく宇宙の大道宇宙の大精神が吾々の手の舞ひ足の踏む所に現はれてゆく、即ち互の身がソツクリ智慧の姿となる、これが智慧で有ります。

それであるから禪と戒と慧との關係は少しも離れない、戒定慧の三學の上からいふと戒は戒法、定は禪であるから定の力に依つて本當の眞理が其所に現はれる、其眞理を認める智慧も亦定に依つて現はれる、即ち戒法の功徳に依つて互の身が修まる其修つた徳に依つて宇宙の大智慧が現はれる、是れ戒法に依つて智慧が現はれるのである、そうして戒法なるものは前にも申し通り智慧の作用が勝れて心清よければ天地皆な清らかななる、心正しき時は天地皆な正しきを得る、即ち戒の作用になる、智慧は水の如く、戒は波の如きものであるから智慧が即ち戒といふことになる、水清らかなる時

は波も清らかである、承陽大師の御歌に

濁り無き心の水にすむ月は波もくだけて光りとぞなる

綺麗な水に月が映つて居る様子にことよせて詠まれた歌であるが、月とは天地の道に喩へ、佛様のお慈悲にも喩へたもので互の心が静つて所謂禪的心に成つた之が濁りなき水である、然うすると佛の心天地の道が清く静つた吾々の心に映つて輝くやうになる、濁り無き心の水にすむ月は其時の波のやうにお互が朝から晩迄種々様々と碎けて居る波の一片々々がお月様の光明によつて金波銀波と成つて現はれてゆく、お互の朝晩の働きがソツクリ水となつて働く、佛の光明の中に住居をしてゆくことになる、して見ると此戒定慧の三學といふものは最も佛法に於ては大切であるが、其三學の一番根本骨髄となるべきものは禪である、又單に三學の骨髄なるのみならず一代藏經の骨髄と成つてゆく、之が禪である、達磨大師より以前は禪宗といふ別に名を附けた宗旨は無かつた禪宗は有らゆる佛教の一番土臺となつて禪が行はれたものであるが、達磨大師が支那にお出てになつてから後に色々佛教の教義が發達した、其發達に伴ふて彼

方は念佛、此方は禪と云ふやうに分派をしたのであるが、元は達磨大師は釋尊より二十
 八代目の祖師様であるから一代藏經は皆な持ておいて、其一切經を實行してゆくが
 禪である、禪に依て一切經の佛様の悟を自分の身に現はしてゆいたのである、それで
 あるから獨り禪宗のみならず、天台にせよ、眞言にせよ、有らゆる此日本佛教の土臺
 は一種の禪である、念佛には念佛定といつて念佛の坐禪即ち戒定慧の定である、眞宗
 の蓮如上人が一心不亂といふ事について「一心とは阿彌陀如來を頼みまゐらせて佛の
 心と自分の心と一とつに成つたのを一心といふ」と在つて、眞宗さへも斯くの通りで
 あるから餘の宗旨は天台にせよ眞言にせよ何れも禪を離れた宗旨は一つも無い、それ
 であるから禪宗の禪は必ず禪宗だけの禪で無く佛教全體の一番の土臺と成つてゆく、
 之れが禪であります、例へば吾々が絶えず吸て居る空氣のやうなもので、空氣が塞つ
 てしまへば吾々は直に死んで了う、お互の體を見ると食物の這入る胃の腑もあれば血
 液の源となる心臓もある、其外色々あるが其等の諸機械を活動させてゆく根源は即
 ち空氣である、それで禪は恰も空氣の如くにして佛教全體を佛様のものとせずして之

を自分のものとしてゆく根本の土臺は禪に依つて行かねばならぬのであります、なぜ
 かといふと心に迷が有てはならぬから迷を除く、自分の心に悟がなければならぬから
 悟を開く、然して私は禪宗でないから禪を知らないなんと云ふが信仰をする時は矢
 張り禪の觀念でなければならぬ、別に坐禪をする積りで無くとも自分の心を靜めて我
 れといふものを打捨て、佛に向ふ時は即ち一種禪の態度を取つて行かねばならぬ、之
 は名の無い禪である、念佛門外では坐禪の形式が無いから禪は必ず禪宗の特有物であ
 ると思ふ方もあらうが之は禪宗いふ名目がなくて矢張り禪をしておいてることになる、
 禪は決して達磨大師がお拵えに成つたのでもなく、禪宗の御開山がお拵えになつたの
 でもない、釋迦牟尼如來が四十九年の間御説教をなさるには常に禪定に入つて一般の
 人に向つて説法なされたのであるから此禪は禪宗の禪でなく佛教全體の禪で佛教各宗
 の基礎である、マウ一步進んでいふと佛教の土臺である、天地萬象の根本で有つて、
 又人道の根源であると云ふ事を云ひ得るのであります、さうして禪といふ水に對して
 波と成つて現はれてくる戒、即ち佛の掟、此佛の掟と云ふ戒法は佛様が特別にお拵え

になつたのでなく、天地間の徳を戒法と云ふ名目の下に佛が標準を立て、吾々にも示し下さつたので、ツマリ古今に通じて少しも變更のない宇宙の大道の徳を戒法と云ふ名を以て佛は説明をして下された、夫が所謂佛敎道徳談である、そこで曹洞宗の御方は豫て御承知の如く在家の安心決定といふ戒法本位の上から修證不二の法門を説いて慧戒一如の禪を修證義で唱へてあります。

第二章 禪の本領

前には曹洞宗の宗義の大綱に於ける總論とも謂つべき大體のお話を申上げましたが、此章には一步を進めて極純粹の禪と云ふお話を一通り申上げやうと思ふ、禪學の素養の有るお方は別段六ヶしいといふお感じも有りますまいが、初めてお聞きになるお方には第一熟語が違ひます、禪宗流の辭が有りますので甚だお解りにくいであらうと存じますから、成るべく碎いて話をする考であるが、之も見識で無く實際に行つて行くべき實行といふ方面から話を仕やうと思ふのである。

先づ禪といふものゝ行ひ方に二た通り有ります、必ず二た通りには限らぬが、先大體に於て二つに區別されてある、其中の一つを黙照禪と云ふ、黙はダマツテ居ると云ふ字で有りまして、照はテラスと云ふ字である、黙つて居るとは何等の考も捨て、了つて善心も悪心も二つ乍ら起さぬ、斯様に云ふと大層六ヶしい様にも聞きてあるかも知れませんが實際坐禪をして居りますると不思議不思議と云ふ状態に成ります、何ん

にも思はぬ、何んにも思はんければ枯木の様に成つてしまふかと云ふとさうでない、精神の奥底に一つの働きが現はれる、之を照らすと申す、『普勸坐禪儀』といふ曹洞宗の御開山のお示しめになつた坐禪の儀式を書かれた書物の中に「身心自然に脱落して本来の面目現前せん」と云ふお詞がある、之が黙照の意味です、身心とは軀と心です、自然には別段に斯う仕やうと云ふ考を起さぬから自然天然である、脱落とは脱はヌケルと云ふ字で、籠の中に這入つて居る鳥が籠を飛び出して了つた様な形である、落とは總ての境遇に縛られないのをいふのです、吾々は腹が立つとか、忌々しいとか、甚だ不愉快であるとか、斯云ふ物を見て面白かつたとか、厭やで在つたとか、斯云ふ聲が聞えて氣に入つたとか、氣に入らぬとか、善いにつけ、悪いにつけ、お互の精神がそれに執着をする、夫れて日本語では之をコロコロと云ふは其意味だ、吾々の精神は物に取りついてゆく作用を持つて居ります、それであるから見る物聞く物の爲めに精神が取りついてゆく、所謂執着をする即ち縛られてゆくのを日本の詞でコロともコルとも云ひます、コロとは凝り固る昔の詞でコロと云ふものごとと云ふ鳥が神代の時に一

番初めに出来たと云ふ、即ち伊弉諾尊伊弉册尊といふ二柱の神様が鉾を持つて大海を掻き亂して鉾の尖の所に一滴の雫が凝り固まつて鳥と成つたから、この鳥と云ふ、それが今の淡路島だと云ふ説がある、果してそれであるか、神代の事は充分に解りませぬ、それでも凝り固る事をコロと云ふ、お互の心は何所へても凝り固つてゆく性質を持つて居るから略してコロと云ふ、マウ一つは玉盤に走るといふ如く、譬へば塗板に玉を載せた様な形で、彼方此方とコロコロと轉がる、之を略してコロとも云ふ、斯くの如くも互の精神と云ふものは常にジツとして居らないで何かに凝り固つて行くか、又は氣移りがして四方八方に精神が働いて行くから心です、併しそれが決して悪くない萬物の靈長たる所以である、見ないことまで思つて居る想像力なんといふはさうです、是から明日に成つたら何うなるであらう、此所で之を植え附けたら此の米が何う云ふ實を結ぶてであらう、茲へ松の樹を一本植えたならば数十年の後はどの位に成るであらうと、三十年五十年の後の事迄も心の中に寫して居る、心は現在に於て四方八方に移り變るばかりでない、過去現在未來に迄コロコロとして働きの現はし居

る、併しそれが爲めに一面に於て種々の迷ひといふものを惹き起す、善にせよ惡にせよ、心は悪い方にも迷ふ性質があるから、善い方にも亦執着をすると云ふ性質を持つて居る、「己れやれ巖をも通す梓弓」と思ふて何所までも忠義を盡くさうと云ふ善い性質を若し悪い方面に使ふと或は財産に迷ひ、或は人の姿に迷ひ、或は名譽といふものに迷ひ、それが爲めに人を欺き、世を欺くといふ様な罪を造る、それであるから心の一番の根本からサツパリと奇麗にしてゆくには、凡て見る物聞く物に迷つて居つた心を脱するを云ふ、譬へば籠の中に居つた鳥が外へ出た様な意味です、マウ一つの落とは落々と續いて物を落して體に塵垢の附いたのを水で以て洗ひ落して塵もなく垢もない奇麗薩張りとした境界が落々である、お互の精神が奇麗に成つて身體が能く調和してゆき、殆ど天然に復すると云ふお互の心の中の様々な苦しみや迷ひが自然となく成つてしまふ様な状態になると、自ら求めずして腹の中に精神の光明が自然に輝いてくるのを本來の面目現前すといふ、此世で親から貰つた體で無く此世に生れない以前から生れも死にもせない所謂生死を飛び超えた精神の本体を本來の面目といふのです、其本

默照禪は
禪の正門

來の面目が現前すると自ら一切の妄見を拂つてゆく其妄見のなくなつた當體にお互の精神の光明が輝いてゆく、之を靜といふ、何事も思ふまいと思ふも亦思ふのであるから、「思はじと物思ふ思ひは思ふかな、思はじとだに思はざりけり」とある如く煩惱といふものがあるから靜まれ〜と云つても靜まらぬ、其方へ氣を取れて却て心が落着かぬ、お互がお湯にても這入つて後、體を風の吹く所て涼んで居る時は何を思はぬ「平常の氣持にほしや風呂あがり」湯から上つた時の心は佛様です、併し湯から上つた時ばかりが佛様で、舊の娑婆へ歸る様な事ではいかぬから、お互の精神の訓練は坐禪の力に依つて精神の根本から奇麗にしてゆく之を默照の禪といふ、之が禪の正門の入口であります。

併し禪には此正門ばかりでない裏門もある、禪宗の裏門として説いたのを看話の禪といふ、何故かと云ふと黙つて坐つてゐても心を落着けやうと思つても落着かぬ事がある、また何等の方針もなく目的もなく坐つてゐては何時までも悟ると云ふ時は無い、或人が悟らうと思つて七日間ばかり坐禪をして居つたが一向に悟れない、時々御

家内杯が催促をする(家内)貴方は根氣能く坐つてござるが何うて有りませぬ悟れましたか(主人)未だ悟れない(家内)何か解りましたか(主人)何も解らぬ無我無中だ、七日目の朝に成つてニコニコ笑つて御飯を食べてをる(家内)貴方何にか悟れましたか(主人)坐禪はつまらんものだと思つたら存外効能があつた、昨夕坐つて居るうちに三年以前に金を貸したのを思ひ出したと云つたと云ふ話がある、そんな坐禪では困る、然ういふ風に見當が附かないと精神を落着けやうと思ふても落着かぬ、唯無意味に坐つてをる様ではいかぬから、古の禪宗の高僧方が方便を以て看話の禪と云ふものを思ひ附かれた。昔の達磨大師や六祖大師の云はれた言語を話すと、斯云ふふうてあるとかあゝ云ふ事を云はれたと申す、之も話に相違ないが斯う云ふ時分ばかりが説法でない、平常も茶を呑んだり、御飯を食へたりして居る間に、口を利きます、其口を利く事が一々佛法に成つて現はれなければ、本當の衆生濟度とは云はれぬ、實に演壇等に出ると宗教の話をするが座敷へ歸つて茶の一盃も呑むとマウ仲々然うはいかぬア、今日は暑くてつらかつたとか何んとか思ふ、「いふまいと思へど今日のあつさ

哉、暑いと云ふても涼しくはならぬ、それであるから古の聖人賢人と云はるる人は「造次にもこゝに於てし顛沛にもこゝに於てす」て平常のする事爲す事が道と成つて現はれて居る、例へば教育に従事するにもさうです、口の教育ばかりでない心で教育をせねばならぬ、心ではかりていからんから身體で教育をする、之が教育家の理想で有りませう、して見ると體の立居振舞が悉く教育になる、あの人が寝て御さつた結構な休み方だ、行儀正しい、寝て居る姿が直ぐに教育になる、先生がお這入りになつた足の運び方靴の脱ぎ方迄が肝腎であると思ふと靴を脱ぐのも歩くのも皆な教育になる、斯くの如くに平常の爲る事なす事が皆な教育となつてゆく様なもので、達磨様や六祖大師の平生の茶飲み話の辭が、一つの問題となり、吾々の目標となつて、自分の心で眺めて研究して行く坐禪を看話の禪と云ふ、臨濟宗杯で白隠和尚がよくやつた隻手の聲を聞けといふ之も一つの公案である、人が来て私は坐禪を致したいから工夫の仕方教へて貰ひたいとでも云ふと隻手の聲をお聞きなさい、此隻手には耳を破る様な聲がある、此聲が聞えますか、薩張り聞えませぬ、之を聞かんければいかぬ、隻手に聲

の有る事を聞きなさいと云ふ、所が餘り工夫に熱心の餘り狂人じみてしまつてはいかぬ、御承知の通り白隠禪師は近代の高僧であるが、此人のお弟子に豪い人があつた、白隠禪師が御遷化になつてから今日迄随分立派な人が出て居る、仲にはチツト威心せない人もある、白隠禪師のお弟子の中に於て女でこそあれ見識に至ては立派な人も叶はぬと云ふおさつ婆さんの如きは十六の年に考へた、自分も女と生れた以上は何うかな立派な家へ嫁入りをして獨立思想のある人を良人に持ちたいと云ふ考を起した、トコロが自分の器量がそれ程に立派でもなく、學問があるでもない、之は何うしても佛様のお力を借りて好い所へお嫁に行きたいと斯云ふので、御佛壇に向て熱心に高王觀音經と云ふ御經を讀んで居つた、妙なもので、一生懸命にお經を讀んで居るうちに之が一つの坐禪となつた、前にも申した通り、お念佛も坐禪であるが如く、自然に禪理に契つて來たので有ります、藤澤の遊行寺の開山一遍上人の歌にも「唱ふれば吾も佛もなかりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして」之が一つの悟りて、佛様と自分との隔てが無い事になる、今のおさつと云ふ娘も初めは唯自分が慾張根性よりして好い所へお嫁

に行きたいと思つてお經を讀んで居つたが、何つの間にか精神が靜まると同時に自分の心が一種の坐禪の姿に成つたと見える、終にはマウ嫁に行きたいと云ふ様な考もなく唯有り難いと云ふ信仰心ばかりでお經を讀んで居るうちに後には有り難いと云ふ考も通り越してしまつて有難いとも有難く無いとも思はん佛も我も無かりけりと云ふ所まで熱心に成つてお經を讀んで居る、其中に妙な悟をしたもので高王觀音經といふ御經を自分のお尻の下に敷いて坐つて居る、お父さん驚いた、(親父)是れ娘やお前は何うしたのか勿體ない御經文を尻の下に敷いてゐるとは何うしたのか、(娘)お父さん妾のお尻と御經文と何らの方が有難いてせう、親父さん驚いた、(親父)娘お前は氣を確かに持たんけりやいかんぞ御經とお尻と何方が有難いとは何事である、(娘)お父さん解りませぬかお氣の毒千萬である、之が解らん様では本當の佛法は解りませぬ、お尻が有り難くないとか御經が有り難いとかの隔てをつけてゐる中は本當の安心は出來ませぬ、佛も我れも無かりけり、我と云ふものを捨てしまつて無我の境界に至つたら貴い者も賤しい者も無い、眞の平等である、何うですかお父さん解りま

したか、(親父) 何を云て居るのか乃公には解らぬこれは困つたものだ大事な娘が氣が狂つたからと云ふて松蔭寺の白隠禪師の所へ往つて斯様く有りませすと云ふと、(白隠) ソレは面白い娘だ發狂であるか發狂でないか試験をして見れば解かる、試験の問題をやると云つて短冊に一首の歌を書かれたのは「やみの夜に啼かぬ鳥の聲聞けば生れぬささの父ぞこひしき」といふ歌です暗の夜に啼かない鳥の聲を聞く之は矢張隻手の聲と同じであります、(親父) 之れは方丈さん何にてす、(白隠) 何にと云つてもお前には解るまいが娘に見せたら解るであらう、(親父) これは狂人と狂人の問答だと思つたが仕方がないから短冊を持って往て娘に見せるとおさつといふ娘さんが其短冊を見て「白隠も亦恁麼に云ふか」と和尚さんは旨い事を云はれる流石は和尚さんだ感心であると云ふた、(親父) 娘や之は何んと云ふ事か、(娘) 貴公に説明しても解らん和尚さんと妾との以心傳心です、(親父) 娘が何を云つてをるのか少しも分らぬ、夫れから父親は飛んで往きて白隠禪師にその様子を申上げると、(白隠) それは面白い連れて來いといふのでおさつは白隠禪師の許に於て禪宗流に本當の坐禪を授けられたから、白

誤られた禪

顎長の長四郎と禪

隱門下に於ても氣鋒は當るべからざる程に鋭くなり、見識に於ては堂々たる天下の雲水もかなはぬ程に成つたのである、さう云ふ事は我が曹洞宗の禪から云ふと氣狂ひ禪である、さう云ふ事が果して禪であるとすれば、今日吾々が國家に對し社會に對する秩序と云ふものを没する様になる、即ち天子様も吾々も同等であると云ふたならそれは國家大亂の基である、佛法は元來さういふ狂氣的のものではない、世の中の秩序階級を重んじ、法律を重んじて、其上に超然として人世を解脱した身心脱落と云ふ境界を得るのが禪の妙味の存する所である。それで此反對の例を引きますと、有名な劍術家で且つ禪定家であつた山岡鐵舟居士の取つて置き話と云ふがある、それは駿河國の顎長の長四郎の話です、此者は性來顎が長かつたから人が顎長の長四郎と云つて居つた、此者は元は泥棒であつた、厄介な顎長があつたものです、それが常に二三百人の子分を居つて駿遠三の三箇國に涉つて始終惡事を働いて暴れ廻つて居つた、或時一人の禪僧が京都から江戸へ行かうと云ふので沼津の宿へ泊りました、其泊る日に途中の茶屋で長四郎と一緒に居つた、トコロ

三
が彼の僧は江戸表の役所の僧と見えて禪僧にも不似合に澤山金を懐中してゐる様に見えた、ソコで長四郎は私も江戸近くへ参る者でありますから旅は道連れとやら申しますから之れよりお伴致しませうと云ふて互に同行の約束をして其晩は沼津で同宿する事になつた、所が同宿してゐて盗んで直ちに露現する恐れがあるから、態と其晩は他所へ出掛ける事に決心して宿へ着くと長四郎が其僧に向て、私は明日正七ツに戻つて来ますが之から一里許りある田舎へ用事があつて往きて参りますと云ふて、旅宿を立ち出でた、固より其道には巧みなる奴であるから時刻を計り直ぐ引き返して、宿屋の高塀を乗り越え庭の小蔭に身を潜めて、夜の深けるのを待つてゐた、追々と夜も更けて下や二階の様子を窺ふと、最早や寂々寥々として誰も起きて居る者は無い様子、マウしめたと思つて座敷の前に来て、ソツと障子を開けて内を窺ひ見ると、ボンヤリと行燈の火がとぼつて居る、蒲團は敷いて有るが和尚の姿は見えず、和尚が居らんのみならず凡そ三四尺も有らうと思ふ程の栢の樹が一本蒲團の真中に突き立て居る、之を見た長四郎は非常に驚いた、之は何うした事であらうと、恐る／＼座敷へ這入らう

禪僧栢樹に化す

と思ふと、今迄栢の樹と思ふたのがハット思ふ間に直ぐ禪僧の姿に成つて端然として坐禪をして居る、道の長四郎も之には恐入つた、(和尚)お前は太層早く歸て来たがマウ用事は済んだのか、(長)ハイ済みましたと云ふたが餘りの不思議に却て自分の方が恐しく成つて其まゝに臥床についた、其翌日に成つて長四郎は考へた、何うも此和尚は魔法使ひては有るまいか豪い術を知つて居る、昔の大蛇丸は蛇に成つた、自雷也は墓に成つたと云ふが、蛇や墓は動物だから人に殺される恐れがある、栢の木ならば大丈夫である、泥棒でも栢の木に化ける秘術を知つて居つたらどんな所へ這入つても恐しくはない、之れは面白い魔法である、何十人に圍れても庭の隅で栢の木に化けてしまつたら是れ程大丈夫な事はない泥棒法としては第一等の遁身術である、よし一つ此和尚をダマして秘密の方術を授かつてやらうと思ひ、翌日箱根の絶頂へ行き、和尚さん向ふの林の中で休んで行きますせうと勸めて、人無き所へ連れて行き、時に和尚さんお前さんは一體何者か、(和尚)私は出家ぢや、(長)虚言を云つてゐなざる、出家があんな物に化けるなぞと云ふ事があるものか、坊主の化けものなんと云ふは聞いた事が無

い、お前さんは化者か、魔法使ひか、一體私を何んと思ふてゐなさる、(和尚) 貴様は人間だ、(長) 人間は當り前であるが、私の商賣は何んだと思ひなさる、(和尚) 貴様の商賣は何か知らんが顎が長く目附が一寸とキヨロつゝいてゐるが、まさか泥棒ぢや有るまいなア、(長) 所が私は泥棒も泥棒、金看板の泥棒だ、今日までは、恐いと思つた事はないが、昨夕お前さんが栢の木に化けたには私も驚いた、併しお前さん旨い事を知つてゐるわい、何うか幾等でもお金は上げるからあの化け方を教へて下さい、否と云ふならお前さんの命を貰ひますぞと、長四郎一生懸命に強硬談判を始めた、和尚は考へて大に悟る所があつたから、さう云はれちや仕方がない打開けて云ふが實は己れも泥棒なんだ、之を聞いた、長四郎どうもさうだらうと思つた、さうすりや矢張お仲間ぢや、どうか是非私に教へて下さい、(和尚) イヤ教へてやるはやるがチツト六ヶしいぞ、(長) 縦ひ六ヶしくつてもやります、それを覺えたらマウ私は石川五右衛門以上になります、どうぞ教へて貰ひたい、(和尚) それぢや教へてやらうが昨夜乃公は禪宗の公案と云ふものを工夫したのだ、昔し趙州和尚と云へる名僧に、或僧が如何なる

禪僧變化の術を授

か是れ祖師西來意と問ふた、すると趙州和尚は庭前の栢樹子と答へた、これは昔し達磨大師が天竺から支那へ來られたが、其達磨大師の悟とはどんなものかと問ふたのだ、然るに趙州は庭の前の栢の樹ぢやと答へた、昨夜自分は其庭前の栢樹子と云ふ公案を、ウント工夫してゐた、それで私は栢の樹に成つたのだ、貴様も庭前の栢樹子と云ふ公案に向つて坐禪をして工夫をすれば必ず栢の樹に化けられる、工夫の仕方はこれくゝてあると教へられた、長四郎は煙にまかれて之れは何うも仲々六ヶしいから出来るか知らん、(和尚) 何んの六ヶしいとは云ふもの、昔の自雷也杯も皆な斯う云ふ行をして墓にも大蛇にもなる事を覺えたのである、若しこれを工夫しても貴様が栢の樹に化ける事が出来なれば私は何時でも首でも渡してやる、その代り之が出来たら私の弟子になるんだぞ、私は大泥棒だから乃公が子分にしてやる、(長) これは永くかゝりませうか、(和尚) さうだ早く二年遅くて三年、さうして此行は晝夜撓まずやらねばならぬぞ、(長) どうもさう永くかゝつては困るモツト輕便な法は有りますまいか、(和尚) 馬鹿を云へ手前は未だ二十だいであらう、若い者が二年や三年の修行は何んの事だ、

栢の樹に成るとを覺えて大泥棒に成つて天下に名を揚げやうと云ふ長四郎はどうやら決心をした、ソコで坐禪の方法を傳へて下さいと云ふので、箱根山の頂上に於て工夫の仕方を教へて貰ひそれからと云ふものは足の痛いのを我慢して庭前の栢樹子を一生懸命に工夫してをつた、其中に悟りは容易に開ける筈もないが心は段々と平穩に成つて来た、心が落ち着いて来ると同時に天性に具有せる良心の光りが現はれて来た、悟りの方は一向五里霧中に彷徨する有様ぢやが、精神が靜まるに従つて只今の吾身は愧かしい事である、今迄の量見は實に悪るかつた、妄りに他人の金錢を貪り、人に迷惑を掛け、人を苦しめて以て一時の快樂を貪るとは何んたる悪業ぞや、ア、誠に濟まん事であつたと云ふ懺悔心が忽然として現はれて来た、それから益々自分が濟まないく、と徹底悔悟し、しかも自分から其心が起つたのであるから、遂には數百人の子分共を集めて貴様達も今迄の悪事を止めて正業に就いて呉れと云ふて、有金其他の財産は悉く皆な子分の者共に分配して遣り、自分はマウ殆ど無一物の身となり、以前の罪滅しと云ふ心で、今度は俠客と成り、人を助け人を救ひ、自分の身は生れ代つた様な

好人物となつて、世間からは義人として敬はれる様に成つた、此所に於て江戸に至りて自分の師たる彼の和尚さんを尋ねたら、芝の金地院と云ふ臨濟宗のお寺にゐる和尚で在つた、それから直ぐに其弟子となり、俗人の姿では有るが、國元に於て生涯坐禪を修行し、しまひには餘程禪定力も進み六十餘歳で立派な往生を遂げた、其長四郎が死に際に至り、子分の者共が来りて毎日く看護をして居つたが、マウ息を引きたらうと云ふ時に、一同の者に告げて云ふには、人は死に際に念佛を申すと佛の御導きを頂くとやら、人は死に際の信心と誓願とが大事であると云ふことだ、併し私は今日迄此娑婆に居て未だ多くの罪の借金がある、大勢の人を苦しめた罪業の借金は其利息も高いさうな一粒万倍の罪の利息を拂ふのは仲々容易でない、若しや地獄へでも生れた時は借金済しが出来ない、依て最後の念願として私はマウ一度此世に生れて来て佛様の行持を修行して其の罪滅ぼしをしやうと思ふ、お前達も續々善行を修めて今迄の罪滅しをするが肝要だ、自分も再び此顎長で生れ替つて来たいから念佛の代りにどうか顎長の長四郎と唱へて佛様に大願をかけて呉れと頼んだ、一同も其志に感心し

て御念佛の代りに當人の名前を唱ふるは變に思つたが當人の望みであるから、一同が聲を揃へて頸長の長四郎くくくと唱へて佛様に願をかけてやつた、長四郎自身も之を唱へつゝ歡喜の面に手を合せて眠るが如くに往生を遂げたさうであります、これは山岡鐵舟居士の取て置きの話で私も何遍も聞かされた、斯う云ふやうに坐禪をして充分に悟りが開かぬまでも吾々の心の一切の罪惡の根據たる妄念煩惱を打ち拂つて精神の光りが輝いてゆくと云ふ事になれば坐禪が矢張り人間道德の一番の土臺となる、是も皆一種の看話の禪である、即ち庭前の栢樹子といふ公案を工夫して行く其處に達磨大師の悟りが自分の精神に輝いて来る、彼の北越地方ではお婆アさん達が和讃を唱へる、其和讃は

歸命頂禮釋迦如來拜まうとすれば雲かゝる、如何なる邪見な雲ちややら、雲は邪見ちや無れども、我身が邪見で拜まれぬ、

等です、實に心に掛る邪見の雲を打ち拂つてしまつて洗ひ流したやうな精神に成つて此の看話と云ふ一つの工夫が非常なる力と成つてお互の生れぬ先きの本當の心が現は

れる、『坐禪箴』と云ふ書物の中に

「一念不動を坐し爲し、萬法源に歸するを禪と爲す」

とあつて必ず足を組んだ坐禪でなくても、吾々の心が大磐石の如くなつて物事の爲めに動かぬ、縦ひ身體は坐はらんでも心が坐はる、之が眞の坐禪である、それであるから皆さんも、お子供衆や孫さん達にも坐禪の意味を教へて戴いて、如何なる場合に臨でも自分の精神を亂さない様に致したいものであります。

近年迄宮中に御奉公を致されたる歌の先生であつたる税所篤子と云ふ人は、皇后様や皇太后様の大變御信用を得た立派な御婦人であつた、此人は鹿兒島の人を良人にもつて京都に住居をして居られた中に、不幸にして良人が若死に致されたが、篤子さんは學問があつて、書家であつて、器量は好しするので、相當の家へお世話をしやうと云ふ人が澤山出て来て、色々と勧めたけれども、自分には良人の阿母さんが未だ鹿兒島にあるが定めし御不自由であらうと思ひ、良人が亡くなつた以上は良人に代つて阿母さんに孝行をするが良人に對する貞操で有ると云ふ考から、鹿兒島へ行きて

姑に事へられた、所が姑は古今無類の邪見な老婆アさんであつた、斯ういふ時のつらいことは女ばかりでない、男子でもさうです逆境に立つのはつらいものです、老婆アさんは意地が悪い、嫁窘めばかりして居る、當分の中はさうも無つたが、益々意地が悪くなる、小言も唯叱り附ける丈けならよいが、脇からツネル様な小言を云ふ、例へば老婆アさんの口に合はん様な御飯が出来ると、是れから氣を付けよと云ふ位なら宜しいが、お前は妾に何う云ふ怨みが有つて斯んな御飯を食べさすのかと云ふ、篤子さんの身に成つては堪らないです、眞綿で首をしめる様である、篤子さんはつらい事はつらいが、イヤイヤ自分の勤めが足らぬのである、温平たる玉の如き優しい氣性の篤子さんはすこしも恨めしいと云ふ量見を起さない、トコロが世間の人の口が噓しい、あの嫁さんは佛様の様だが、あの老婆アさんは鬼老婆アさんだ、到頭老婆アさんの事を鬼婆くくと綽名を付けてしまつた、所が、その事が老婆アさんの耳に這入つた、世間の者は妾の事を鬼だと云ふが、嫁杯も矢張鬼だと思ふてゐるであらうと、斯う思ふと一段嫁が憎く思ふ様になる、或時老婆アさんが篤子さんを召んで、妾は歌を半分程

詠んだが、お前は歌が出来るさうなから妾の歌に上の句を付けてお呉れと云はれた、(篤子)何う致しまして歌を詠むと云ふ程の事は出来ません(婆)イヤ遠慮しなさんな下の句が出来たに依て上の句を付けなさいと云ふ、(篤子)それでは失禮ながら貴女の歌を拜見致したうございますと云ふと、老婆アさんが「鬼婆なりと人はいふらん」と云ふ句を詠んだ、實につらい問題です、それで以て篤子さんの精神を見て、若し氣に入らんければ篤子さんに喰つてかゝつて、腹癒せを仕やうと云ふ考であるから、顔色を変えて苦笑ひをしながら篤子さんの顔を見つめて居つた、篤子さんはそれを見てハット思ふて顔を赤らめて居つたが、自分には老婆アさんを憎む量見はない世間の人が斯云ふ事を云ふのは却つて恨めしいと思つたから、涙を浮べて失禮ながらあなたの歌に付けませうと云つて、篤子さんは直ぐに筆を執つて「佛にもまさる心と知らずして」と斯う附けられた、これが篤子さんの安心です即ち「佛にもまさる心と知らずして鬼婆なりと人はいふらん」初め厭らしかつた歌が實に立派な歌になつたのです、實に自分の良人の阿母さんであるから縦ひ身命を擲ても孝行をせねばならぬ、阿母

さんの小言は自分の足らぬ故の御教訓であると思へば少しも腹は立たないのである、一時の間に合せの調子で詠んだ歌ならば格別、誠心誠意の篤子さんは斯云ふ觀念を以て自ら慰めて居つた爲めにかう云ふ歌を詠んだのである、其志に感心してさすがの強情なち婆さんも其後は態度が一變したといふことです、これは全く篤子さんの徳に依りて感化せられたものです、上の人の徳が下の人を動かしてゆくのみならず、下の方の徳が又上を動かす力を持つて居る、此觀念を互が逆境に處した時分に持つべきである、斯う云ふ風にしてゆけば自ら煩悶等の心が動きませぬ、是が本當の坐禪です、萬法皆源に歸すると云ふ其の根本は道です總ての爲す事が皆な道に成つてしまふ、之が本當の禪です、諸君が外へ出て色々働きをなさる、内へ歸つて内の仕事をなさる、農家は農業、商家は商業、各々自分自分の境遇に處して吾が守るべき道は堅固にして動かぬと云ふのが坐禪である。

併し其坐禪には息を調へると云ふ事が大事である、是れは調息の法と云ふのです、近頃では大分衛生上から調息の法を行ふ人がある、二木博士の如きは若い時分には非常に

體が弱くて、胃病が有つて、肺が弱くて、其上に肋膜炎を持つて居て、肝臓が悪くて腦が悪くて、さうして眼が悪く、随分厄介な人であつた、到底學問をして成功を見る事は出来ない、親さんも力を落し、自分も力を落して居つた位である、所がフトした事で、白隠禪師の夜船閑話といふ本を見て息の調へ方を發見した、又平田篤胤と云ふ神道の學者が佛法の事杯は随分悪く云つたが矢張り自分は息の調へ方杯は佛法の方を行つたものです、尤も此先生のやり方は仰向きに寝て居つて息を調へる方です、さう云ふのを二木博士が見て、非常に感じて以來熱心に行つた、爲めに服薬もせず唯息を調へる法に依りて身體が調へて無病健全に成つた、何うしても今日日本國民の身體を達者にして行くには坐禪の呼吸法で無ければいかぬと云ふのが二木博士の腹式呼吸法であります、今盛に世の中に紹介して腹式呼吸法と云ふ書物迄出て居ります、之れは前に申した坐禪の息の調へ方であり、夫れは決して六ヶしくない、坐禪の様に足を組むのでない、悟りといふ目的でないから、精神の方は第二です、唯だ身體を健康にするばかりに行ふのであるから、先づ足の尖を重ねて其上にお尻を上げるやうにし、

さうして前の膝を廣げるやうな氣味に成つて坐はる、下腹を突出す様にして後は坐禪の法で、深く呼吸をする、坐禪の方では鼻息微かに通ずと云ふが、醫者の學問から研究しても矢張り鼻から息をする方が宜しい、平常でも鼻から呼吸すると冷い空気を吸はないで、途中で温めてくるから肺部を刺戟する事が少い、寒い時杯は口から吸うと寒冷なる空氣の爲に呼吸器を冒されて、咽喉答兒杯を病む若し何うしても鼻から呼吸する事が出来なければ吸う時丈でも鼻からして出て行く息は口から吐き出しても宜しい、殊に若い婦人方杯は何うしても俯向いて坐るから、下腹に充血すると三宅醫學博士は主張して居る、下腹に血が滯りますと胸が狭くなる、何か聞いたことでも神經に障つてクダラない事をいつまでも諦めがつかんと云ふ様になる、即ち神經質の病氣を起す、女の方杯は別けて坐禪をすると宜しいと云ふて居ります、人には大體腹の力を強くする事が大事で、此頃は學問をしても腦に力を入れる、頭を多く使ふに依て縦ひ十分間でも二十十分間でも坐禪に依つて學問をすると、腦の血が下つて腦を自然に冷にしてゆく事になる、さうして身體の一番真中は腹であるから心を落着けるに都

合が好いと云ふ、唯今迄は腦髓に許り心があるといつたのが、近頃ではマウ神經全體に心が通じてゐると云ふ事が學者の定論である、悟らうといふとは假りに第二として、皆さんが夜分お休みになる時に下腹に力を入れて手に定印を結んで此の態度で坐禪をなさるが宜しいと思ふ、お念佛を唱へるお方は此姿でお念佛をお唱へになれば宜しい、殊に日本は坐つてゐるといふ習慣があるから腹力が非常に強大であると云ふ、二木博士杯は丹田と云つて臍の下に力を入れて坐つてゐるから腹を押しても手のはねつけられる位ださうですが、今日では非常に健康であるのみならず心が落着くから物事に狼狽んやうになつたと云ふ事は事實であります、さうして坐禪を行つて行く人に最も必要なるは信仰である、佛様の教は有り難い、坐禪をして縦ひ一日の中で五分間でも十分間でも此身此儘佛の光りを現はして行かうと云ふ一つの信仰がなければならぬ、それから自分の精神を氣高く持つて行くと云ふことが又肝腎である、世の中は名譽も大事、財産も大事である、又食物も衣服も大事であるが、夫ればかりが大事だと思ふとさうでない、夫れ以上に大事なものがあれば名譽財産等の大事なものを抑えて

ゆく、縦ひ食はず飲まずに居ても大事なものがあれば専ら其方へ心を注いでさうして超然たる自分の樂しみが出来てくる、古の人杯はさうであつた。

俳諧師に一茶と云ふ人が有つた、この人は信濃國の人であつたが、六歳の年に初めて歌を詠んだ位の人でありましたが、幼少のころより繼母の手に育てられた、繼母が非常に邪見な人であつて、六歳の年に椽側に出て遊んで居ると雀が来てチウ／＼と啼いて居る、子供心にも私しの様に阿母さんを持たぬ雀があるて有らうかと思ふたから「我れと来て遊べや親の無い雀」と詠んだ、如何にも同情の念に富んだ句で有ります、追々歌が上手になつて後には有名な俳諧師になつた、二三年前に長野縣で共進會があつた際に禪學の講習會をしました、其時に一茶展覽會が有りまして色々一茶の物を見ましたが、「やれ打つな蠅が手を摺り足を摺る」蠅があつた通り手を合せ足を合せて拜んで居るではないかと云ふ句の中にも同情の念が自然に現はれて居る、或時お寺へ行きて碁を打つて遊んで居ると或る男が一人来て云ふには「私は三兩の金を借るに名主さんの保證でなければ貸して呉れんと申しますが、折悪しく名主さんは不在で困りましたから和

尙さんの所へ知慧を借りに來ましたと云ふと、一茶先生碁を打つて居りながら夫を聞いて乃公が保證に成つてやると云つて借用證に裏書をした、先生直ぐ筆を取つて乃公は印形も何にも無いがと云つて「右の通りに御座候 今日日月」それが裏書です、その證書を以て行くと此裏書ならば三兩の金は返すに及ばんたゞ呉れると云つて、裏書一つでたゞ貰つた、然らう様な事は展覽會に澤山出て居りました、加賀の前田侯が江戸表へお出でになる時柏原と云ふ所でお休みに成つたら態々一茶先生を御召びに成つたが、私は衣服の支度がないから御免を蒙ると云つて行かなかつた、普通の人は百萬石の殿様が御召しになつたからと云ふて大喜びだが、一茶先生は野人禮に習はずと云て殿様に御目に掛る禮を知りませんから御免を蒙ると云つて應じないから、御使ひの人が錦の雅帳を持って往て書いて呉れといふと、(一茶)私はこの様な立派な物に書いた事がありませぬ(使者)それでは粗末でも宜しいと云ふと一茶先生粗末な筆を口に啣へて墨も碌々附かないのを以て無造作に書いた、「子供等がのの様といふ梅の花」と、前田侯は梅の花の御紋であるから子供等がのの様と云ふて馬鹿騷ぎをしてをる、百萬

石何んの事だ然もそれが無造作に書いたから使ひの者は立腹をした、けれどもどんなでも宜いからと云つて頼んだ事であるから仕方がない、獨りブン／＼として禮も碌に云はずに歸つて来て殿様に申すと、此は面白い此が一茶の一茶たる所以だと云つて前田侯は非常に御賞讃をなされて、餘り硯箱が粗末であると云ふ事を御聞きに成つたから巻繪をしたる梨地の硯箱を贈られたさうである、それを聞いたる土地の人々は此村の名譽であるなんと云ふて近所の人達が澤山に来る、殿様がヤクタイもない物を送つて呉れたと思つて居る、道具屋が来て云ふには此品物ならば何百兩にでも買ふとか貴公が要らなくなつたら譲つて下さいと云ふ様な事を何回も云ふから、(一茶) 御前が夫程に欲しけりやあける、(商人) それでは無代下さいますか、(一茶) 無代上げる道具屋は喜んで貰つて往つた、一茶先生は却て喜んだ、あんな物が来た爲めにどんなに五月蠅かつたか分らぬと申したさうです、之は極端の性情を寫したのであるから斯う云ふ事は全部吾々の御手本には成りませんが、併し萬兩の財産が目の前に有てもどれ丈けの名譽の地位が目の前に在ても道に背いた事ならば決して振り向かぬと云ふ事は

名譽黄金
以上の理
想

平常から養つてゆかねばならぬ、道徳の上から云ふと 陛下の御勅語にも「克く忠に克く孝に」とあるが、其忠義孝行の爲めには縦ひ數百萬兩の金にも心を動かさぬ、日露戦争でも黄金の爲めに目が眩んだ所の露探なんと云ふ者が一人でも二人でも我が帝國の人民に在つたのは全く利の爲めに目が眩んだのである、大閤秀吉の語に「金もいらす、名もいらす、命もいらす人程厄介なものはないが其厄介な人で無ければ共に天下の事を謀るに足らぬ」と云ふて居りますが、金錢よりも名譽よりも超然たる一種の理想を此禪に於て養つて行かねばならぬのである、それは吾々の鍛錬にあります、心を充分に錬り鍛へてゆきますと自然に人を感化する力が備はる。

越後國の高田と云ふ所の或小學校の校長さんであつて只今は他へ轉任に成つて居りますが、五六年前の話である、高田町の某寺に折々遊びに来られて和尚さんと交際をして居られた、その校長さんが云はるゝには、何うも私は困る事が一つ有ります、私は先年妻を貰ひましたが、何うも妻の心得が宜しくない、猜疑嫉妬の念が深くて困ります、色々教訓をしても妻は其教訓に従はないので私は尙更ら自分の品行を正しくし

て何所へ行くと云ふ事も明に告げて行いても、尙ほ疑ひを起します、會議若くは校務の爲めに歸る事が遅れても妻は腹立て、下女や杯にもつらく當ります、教育家として實に慚愧千万である、妻を迎へた爲めに實に教育家として友人に對しても汗をかく事が多いと云ふ事を云つて非常に慨嘆して話された、所が其寺の和尚さんが云はるゝには貴公は佛様は何うして御居でなさると問はれた、すると先生の云はるゝに未だ書生同様の身の上であるから別段に佛を迎へたと云ふ事も有りませぬ、何分自分の内には未だ不幸があつたと云ふ譯でもなく、兩親は未だ郷里に達者で居りますからといはれた、和尚さんが云ふにはそれだからいかない、試みに私は貴殿に掛圖の佛様を進上するから掛圖に向て拜んで見なさい、さうして奥さんに一種の信仰を起させてみたら何うですとて或る佛畫を與へた、すると校長さんは自分の内へ歸て別段に有り難いと思ふ譯でもないが毎日學校へ行く前に其佛畫に線香を立て、拜む、學校から歸ると又其前へ往つて頭を下げて拜む、さうする内に奥さんも何にか御菓子でもあるとか果物でもあれば其佛様に備へる、妙なもので其内に自然と信仰心が起つたかして何時の

さ

間にやら奥さんの性質が一變してしまつた、校長さんも成程信仰と云ふものは妙なものである、宗教の威力宗教に對する觀念は一種特別であると云ふ事を感じて今日では非常な着實なる信仰家に成られた、其校長さんには私も御目に掛つたとがあります、斯云ふ様に自分が縦ひ坐禪といふ意味で無くとも佛様に向つて自分の精神を靜めてゆくのみならず他人の心をも靜めてゆくと云ふ一種の感化力が現はれて来る。併し此の坐禪の中に於て惡平等に陥る事を誠めねばならぬ、坐禪は見識が高いから動もすると世間を馬鹿にする様な傾になる、彼の一茶の様な眞似をしたならば、世の中を輕蔑する、兎に角大名と云ふ様な方からお招きを受けたら餘務を差繰つて御目に掛ると云ふ事が人として目上の人に對する禮である、その禮が進んで行けば君に對しては絶対に忠義を盡し、親や先祖に對しては絶対に孝を盡し、友人に對しては信義を守り社會の秩序は嚴然として守つてゆくと云ふ事になるのである、所に依ては村長さんであるとか、學校の先生とか、菩提寺の住職であるとかと云ふ様な相當身分のある人が通ると學校の生徒は頭を下げて禮を行ふ所がある、さう云ふ様な事は決して不見識

と云ふのでなく、長者に對する一つの作法である、禪宗に於ては見識の爲めに行儀作法を輕んじたり人世を度外視したり言葉使ひを簡略にしたりする弊が多くある、禪宗の御寺さんには口の悪い人が澤山ある、私共の御開山は夫を非常に誠めて居られる、鹿言を使ふ者には禪機がある様に思ひ彼れは見識が高い禪機があると云ふが、さう云ふのは亂暴禪機です、承陽大師の御辭に「威儀即佛法」と云ふ事を仰しやつた、威儀とは行儀作法をいふので、此行儀作法の正しいのが即ち眞の佛法である、吾々が立つべき時は嚴然として立ち、禮を行ふ時は嚴然として禮を行ひ、親に對しては飽迄も敬ひを以て事へ、君に對してはどこまでも誠心を以て事へ奉つてゆくと云ふ人間の禮儀作法が立派に調つた所で佛法が現はれると承陽大師のお示しである、曹洞宗に於ては臺所の事を庫裡又は庫院とも云ひますが、其庫裡の方で味噌でも摺つて居ると價値が輕いやうに思ふて味噌摺坊さん役に立たぬと云ふが、大本山あたりには於て味噌摺坊さんを選擧するは仲々骨が折れる、大勢の中から精選して臺所へ入れる、臺所は在家で申すところかみさんの役で御飯を炊いたり御料理をする、夫れには第一奇麗好きで

無ければならぬ、食べ物を取扱ふから物を清潔にする人でなければいかぬ、さうして物を粗末に仕ない人で、又物の見計ひがよくなければならぬ、例へばお豆腐一丁でも味の付け方鮑丁の使ひ方に依て色々に使はれる、さう云ふ三拍子揃つた人で無ければ味噌摺坊さんの役に成れない、若し味噌摺坊さんが役に立たぬ時は山内中の者が無味い者を食べ、汚い者を食べねばならぬ、して見ると臺所に居て清潔にしてゆく上に物を大切に取扱はねばならぬ、これは吾々の爲めに御恩がある大事な資であると一種の敬を以て取り扱はねばならぬ、臺所の監督でもしてござるお方は斯う云ふ話は參考にしたいと云ふたい、又言葉は丁寧なせねばならぬ、我が日本は言葉の丁寧な國である、器物の名にでもおの字を付けて、お盆などといふ、おとは物を敬つてゆく言葉である、例へば人様の物を呼ぶ時はお道具、貴公のお召し物、貴公のお羽織とか、又臺所の品物でも御飯と云ひ、又御膳と云ひ、お茶碗と云ふ、常に斯う云ふ敬ひの心、敬ひの言葉を以て取り扱つてゆけば自ら其中に天地の眞理が現はれて来る、佛のお悟りが其所に現はれてくる、御開山のお辭に「粥ヲバ、御粥トマヲスベシ、朝粥トモ

マラスベシ、粥とマラスベカラズ、齋ヲバ御齋トマラスベシ、齋時トモマラスベシ、齋
トマラスベカラズ、ヨチシロメ、マキラセヨト、マラスベシ、ヨチツケヨトイフベカラ
ズ、ヨチアラヒ、マキラスルヲバ、淨米シ、マキラセヨト、マラスベシ、ヨチカセトマラス
ベカラズ」と斯ういふてある、御開山時代には斯う云ふ言葉を使つたと見えます、吾々
が物に對して敬ひの心を懷く、其敬ひの心の中にはどう云ふ心があるかと云ふと天地
の間にある一つの品物も皆な實ならざる物はない一枚の紙も實である、天地同根萬物
一體と云ふ事から云ふと吾々の體も天地間の萬物も決して別々ぢやない、畑の中に大
根が出来て居る、田の中に稻の穂が出て居る、稻の穂や大根は別に親類では無いが、昨
日迄畑の中に在つた大根、田の中に在つた稻を、今日自分の口へ入れますと今度はマウ
自分の血に成つたり、肉に成つたりして同化してしまふ、して見ると畑の中にある大根
も、田の中にある稻も、畢竟する所自分の體と兄弟、自分の體と同一である、同一で
あるに依て元來天地同根萬物一體であると云ふ觀念を持て居ればこそ、吾々が生れず
死なずと云ふ天地平等の原理を發見致して、宇宙の大精神を捉えて其平等の見地より

見るのである、之れに依て敵も味方も平等に憐むてゆくと云ふ平等圓滿の形が現はれ
る、此眼を以て見る時に於ては唯人間を粗末にせぬばかりでなく、草でも木でも決し
て粗末にしてはならぬ、斯くの如く天地平等の眞理を認めて物を粗末にせぬと云ふ時
は、臺所に居て味噌を摺る儘が立派な佛の行ひ活きたお經文である、諸君も之から後働
きをなさる上縦ひ水仕事をし、泥仕事をして、仕事をなさる其まゝが悉く天地の
道に契ひ人間の道に契ふた行ひであればそのまゝが自ら禪の悟りとなる、其悟りを
以て國家に盡し、悟りを以て家を治め、悟りを以て文明的な品格ある言葉を使つて行
かなければならぬ、それで無ければ眞の悟りとは云へない、縦ひ見識の高い人杯でも
自分は悟て居る外の者は迷て居ると自慢をする考があれば一つの悟りといふ病が出
來たので、此は私共も三十棒を受けなければならぬ、味噌の味噌嗅は上味噌に非ず、
乃公ばかり豪い者だと云ふ考が有つたならば既に其人は悟りといふ毒に取り附かれ
て居る、其證據は口が悪い、天下の奴等なんと云ふ、さう云ふ事になると世の中が大
騒動で天狗の鼻と鼻との突き合せた、ヨシヤ自分が悟を開いて世の中の人迷て居れ

ば猶ほ自分が迷つて居る如く思ふて人世の中へ飛び込んで涙を以て救ふて行かうと云ふ大慈大悲の働が現はれてこそ立派な禪の悟りと云ふべきである。

それであるから悟りと云ふものを分析して見ると、三つの形が出て来る、第一には智徳と云て天地間を統一する智、所謂天地の源吾々の心の本體、即ち人間の考ては解らぬと云ふものを自分が認める様な大きな智慧、第二には斷徳である、悪い事は斷じてしない、善い事は斷じてすると云ふ一つの勇氣が具はる、勇氣と云つても無謀な勇でない、金時は非常な豪傑であつたが、渡部の綱が金時に向て貴公は勇氣が豪い物事にビクともしないが何か勇氣を養ふ道があつたら教を受けたいと云ふと金時の答が面白い、私は臆病の稽古して今日に至つた、臆病の稽古とは何であるかと云ふと、食べ物を食べる上に於て體に障らぬ様に食べる禪宗のお寺さんにも三度く秤にかけて御飯を食へて居つた人があつた、然もそれが八十幾歳の老僧である、夫を或人が見てそんな事をするのは禪宗の坊さんらしくないでは無いか、御飯が旨まからうと旨く無からうと食べ物位に關はる様では禪宗らしくないではないかと云ふと其老僧がさう

悟と三徳

でない人間食物を以て生きて居る以上此體が可愛ければ食べ物を制限して年を取れば取る程益々食物を制限せなければならぬ人間は世の中に生れた以上一日でも長壽をせなければならぬ人の爲になる身は一日でも多く長らへて國家の爲に此身を愛せねばならぬと云はれたと云ふとである、別に命を惜むぢや無いが身體髮膚之を父母より受けて居る上は吾々の體は大事にせねばならぬ夫であるから金時の如きも御飯を食べる時でも戦々兢々として腹に障らぬ様に食べる臆病の稽古をした況や坐禪の上には善い事はするが悪い事は斷じてしないと云ふ稽古をする大なる勇氣が無ければならぬ、第三には恩徳である、慈悲心を以て世を濟ふ人を見ると猶ほ己の如しと云ふことである、承陽大師の御辭に「鍋頭を自頭となし水はこれ身命なりと知るべし」と仰せられて鍋釜を取り扱ふ上にも自分の身の如く思ふて大切に致さねばならぬ、青年の方々は別けて是等の事は味つていたゞきたい、水は吾々の命と思へ水を粗末にする人は水に不自由をする、金錢を粗末にする人はどんなに財産家の人でも後には金錢に不自由をする様になる、縦ひ一厘の金でも天地の寶と思ふて大事にしてゆく、之は金錢を愛すると

云ふ人間の美しい情の心である、斯様に智斷恩の三つの徳が具つて居らなければ本當の悟りにはならぬ、然らば其の悟りはどんなものか、曰く云ひ難してあるが、併し能く分拆して見ると此三つの徳が自ら現はれて居る、見識は高いが同情の心が少い、それは半分の悟りです、情の心は有るが智慧の働きの無い、夫も片輪の悟りである、此三つのものを打して一團となして自分の精神に蓄へてゆくが所謂證理見性である、即ち天地の眞理を見窮めて夫れと自分の精神と一致した境界に到るが本當の禪の悟りてあります、禪は佛教の基礎であるから、禪の力に依ても互の精神を修め、禪の力に依て佛の道を自分の物とし、禪の働きの依て道徳上の修養といふ目的を達する事が出来たならば釋迦牟尼如來を始め達磨大師にも御恩報じが出来てあらうと思ふ、そこで吾々が道徳の方面に於て禪宗の教に依て實際に行つてゆくには何ういふふうにして行くかと云ふに夫れには掟が無ければならぬ、天皇陛下の御詔勅に父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和しとある、其父母に孝をするには何ういふふうにするれば好いか、夫婦和合は何うしてするのかと云ふ様な實際に於ける修養上のめやすを佛様は戒法とし

てお説きになつた、曹洞宗では授戒入位と云ふ、所謂佛教の實踐道徳である、其等戒法の事は次章に委しくお話を考へである、今は唯だ坐禪といふ吾々の身體を調へ、威儀を調へ、さうしてお互の軀がソツクリ佛様と一致する迄修養するが禪であると云ふ事をお話したのであります。

第三章 禪の實踐道德

志

一 禪と戒法との關係

禪宗に於て道德上の問題は戒法本位であります、即ち戒法を本位として安心をなし、且つ道德を守つて行くといふとに成つて居ります、そこで戒法と禪との關係は何うであるかと云ひますと、前にお話を致した通り禪は戒の本體に成つて居ります、坐禪の力に依つても互の心を練つてくるから自然に吾々の心の光りが現はれて來て日々の振舞が自ら佛の道に契つて行くといふと云ふとに成る、して見ると禪は戒法の土臺で戒法を産み出す所の根源である、戒といふものは禪の働きの總ての方面に動いて行きて其所に現はれるのが戒であります。

自律的
と
他律的

凡て世の中の掟には自律的と他律的との二つがある、他律とは外に一つの掟があつて其掟の前に頭を下げてそれを守つて行く之が他律である、例へば日本には憲法がある、法律がある、如何なる大學者でも如何なる豪傑でも、如何なる財産家でも、其憲法或

は法律の前には絶対に頭を下げて行かねばならぬ、假令は法律の上に於て多少氣に入らぬ様な箇條がありましても、今日現在行はれて居る法律は何うしても日本國民としては一歩一厘でも曲げる事は出来ない、若し悪い點があつたならば徐ろに輿論を惹き起して改正を試みなければなりません、して見ると一旦國として社會として定つたる法律の約束と云ふものは固く守つて行くが他律的である、自律は自分で作つた法律である、人の作つた法律は限りの有るもので、人の心の内に迄立入るとは出来ない、縦に此人は平常の心掛が悪いとは知り乍ら其人を捉へて警察署へ連れて行くとは出来ない、所謂形の上に現はれて始めて法律の權能と云ふものが其所に現はれて來るのであります、人の作つた法律は範圍が狭い、それであるから國家の法律に規定してない事も澤山ある、併し制裁を加へて無いに依つて斯う云ふ事はしても好いといふ様な考を起したならば他律を信じて自分の法律を無視すると云はんければならぬ、世の中には人の働きに於て爲さねばならぬと云ふものと、爲さずには居れないと云ふ二つがある、租税は誰でも納めんければならぬ、どんなに家で差問ても徴兵適齡に合格したならば

兵隊に出なければならぬ、親には孝行を盡さんければならぬ國家の法律には従はんければならぬと云ふは、之を爲さねばならぬと云ふ一つの義務觀念である、即ち世間の法律はそれです、何うしてもせんければならぬ義務を持つて居る、ところがマウ一步進んで行くと爲さずには居れぬ、お前は必ず親切な心を起さんければならぬと云つて一々人が咎めはしませぬが併しながら縦ひ人が咎めても咎めんでも、憐むべき人に向つては自ら涙を流して夫を助けずには居られぬ救はずには居られない爲さずには居れないと云ふが自分で作つた法律即ち自分の腹から出た道徳觀念と云ふものであります、戒法とは斯ういふものであるに依て守ねばならんぞよと云て佛が戒法の相をお説きに成つたのであるから他律ではあるが、併しながらも互の心と云ふものを充分に磨いて行きて悪い量見を捨て、ゆきますと佛様が仰しやらないでも戒法は守らずには居られぬと云ふことになる之は自律であるから之を戒體といふ、して見ると、戒法は釋迦牟尼如來がお定めに成つたものとは云ひながら當然吾々の心の奥から現はれてゆくべき筈のもので、即ち心の徳で有る、戒法には通戒別戒の二つがある、通戒とは誰に

でも通ずる戒法である、縦ひ三千年の昔でも今日でも亦男でも女でも西洋人でも日本人でもどんな大學者でも、財産家でも裏店住居の賤しいものでも等しく守らねばならぬ、どんな人にも守らせる事の出来るのを通戒といふ、別戒とは特別の戒法で其人々に依て變つて居る戒法である、私共には私共の守るべき道があり、又お役人にはお役人の守るべき道がある、學校へ這入て居る生徒には生徒の守るべき掟がある、斯う云ふのを別戒といふ、一切經を拜見すると其人々に依て様々な掟が説かれてある、戒法の中に御酒を誡めなされたといふも之も或る意味に於てお誡しめになつたもので釋尊の御弟子に沙迦多尊者といふ極品行の正しい人があつたが、或る村方に招かれて行きて酒を強ひられた、固より酒が好きであるからドツサリ戴いた、所が足元がシドロモドロに成つて、精神もボーとなつたから、平素の慎み心を失つて途中で寝てしまつた、運悪く大雨が降つた爲に大水が出た、さうして自分の軀が半分程水の中に濡れて居るのも知らずに寝てゐる、田圃の中からヒルと云ふ虫が出て唇に喰附いて居るのも知らずに居る、其姿を見た人が氣の毒に思ふたから戸板の様な物に載せて運んで

あるから、日本へ参りますれば日本の佛教に成る、之れはマア能く説教や演説に出る話であるから私が彼是云ふ事でも無いが先づ日本に於て一番最初佛法を傳へたのは申す迄もなく欽明天皇の十三年である、其時分は佛教についての觀念が其れ迄日本に無つたのであるから日本に入れるとか入れないとか云ふ議論が有つて何れとも決定しない、所が其年に厄病が流行した、さうすると佛教を嫌ふ方の人は大威張りて佛教が来たから厄病が流行ると云つた、さうすると朝鮮から遙々日本の天子様へ献上した佛像を浪華の池へ投げ込んだ、それが今の善光寺の如來様である、即ち是迄無かつた佛教を日本に祭つたから神様のお咎めて厄病が流行したのであると云つて投げ込んだのです、昔の人は誠に簡短な考を起したものです、所が其後に至つて聖徳太子が日本の憲法を始めて御制定になつて推古天皇の御代に憲法十七箇條を御發布に成つた、憲法の第二條に於て佛法僧の三寶を敬せよと云ふも示しがある、又第一條には和と云ふ一字を以て上下心を一にして國家が治つてゆくと仰せられてある、教育勅語には億兆心を一にせよとあり、戊申詔書には上下心を一にせよとあるから國中がバラ／＼では

いかぬ、日露戦争に大勝利を得たのは舉國一致といふ大勢力に依て空前の大勝利を得たのである、支那の元の忽必烈が十萬の兵を以て九州を侵した弘安の役に、日本は大騒ぎで有つた、所が一晩に神風が吹いて向の船を残らずひつくりかへして敵が狼狽して騒いでるのを日本の軍隊が進んで往つて大根でも切る様に切つてしまつたから九州の海は眞赤になつたと云ふ、十萬の大軍を率ゐて来て生き残つた者は僅に三人、之れだけは態と日本が生かしてやつた、向ふへ歸つて戦に負けた状態を報告する爲めに貴様等三人の命を助けるから國へ歸て上手に敗けた事を報告せよと云つて返した、其時は神風を以て敵の船を沈没させたと云ふが、日清日露の戦役には神風は吹かなかつたが、上下心を一にして五千萬人が一と團りに成つて大和魂と云ふ無形の風が軍艦をひつくりかへしたのであらうと思ふ、聖徳太子の憲法の第二條に「人鮮ニ尤惡ニ能教從之。其不歸ニ三寶ニ何以直レ枉」とある、吾々人間には極悪人は少い吾々の心は善とも惡とも定める事は出来る、それであるから吾々には此修養と云ふ事が必要である、彼れは到底駄目であると云つた人が修養の結果非常なる人物に成ることがある、である

から吾々には教育が大事である、お互が生まれた時は善とも悪ともままつては居らぬ、併し其人が教育の力習慣の力に依て善人とも成り悪人とも成るから生れ乍らの悪人は鮮い、人は成育するに従つて我と云ふものが生ずる、心理學上から云ふと吾々の子供の時には我主義と云ふものがある、子供の時分には我れがと云ふ觀念が強い、自分の思つた通りに事をする、腹が空つたと云へば、お客さんの前でも構はん直ぐと泣き出す、これが一つの我主義である、所が大きくなるに従つて自分の責任が出来て来る、義務が出来て来る、色々事情が出来て来る、斯うしやうと思ふてもそれは出来んぞと抑えられる、さうすると自分の思ふ通りに我が通らぬから煩悶と云ふ苦しみを起す、苦しみを起すと夫れが爲めに遂には虚妄を云ふ様になる、古歌に「生れ子がしだい」に智慧づきて佛に遠くなるぞ悲しき」段々事情の關係が深くなると生れ子が次第くのが有つて堪忍をせよ或は勉強をせよ辛抱をせよ我慢をせよと教へる、其教の力に依て始めても互が我と云ふものを抑えて六ヶしい此世の中に居て立派に調和が出来る、

是れが無我主義である、所謂我を轉じて無我にならねばならぬ、さうして無我に一つの作用を起してゆく、それには何うすれば好いかと云ふに其作用の道理をお示しに成つたのが御戒法である、其戒法の力に依て今日の國民道德を進めてゆく事にせんければならぬと思ふ、之が佛教の本旨で悟りが形の上には現はれたと云ふことになる、前にも申した通り威儀即佛法である、悟つたと云ふ人が文明の國民として耻しいやうな野卑な言葉を使つたり握り拳を振り廻したならば、既に口や手に置ける悟は無くなつてしまふ、假令悟は開かなくても自分の口だけは人の御手本になる様であつたならば儘に口だけは悟つて居る、お互が善い物を見て眞に感心したならば目だけは佛様である、一度には佛様に成れぬならすこしづゝ爲し崩しにして佛様になる、追々と善い所に足を運んで善い事を手本にしてゆく様にすれば丁度お月様が一晩一晩大きく成つて十五日には満月になるが如く終ひには本當の圓い佛様が出来る、それには先づ信仰門と云ふのが第一である。

二 信仰門

6

主觀的信
仰

信仰門は主觀客觀の二つがある、主觀とは自分の心を主人として立ち歸つてゆく、例へば人はどんなに悪い事をして吾れは決して悪い事はせまい、之が自分の精神の確立です、併し佛教の上に於ての信仰は何うするかと云ふに自分の心の佛様に向つて信仰をして行く、之を主觀的信仰といふ、「佛法を信する者は先づ須く自己を信ぜよ」自分を信ぜねばならぬ、吾れは必ず佛に成るべき性質を持つて居る、吾々の體の中には立派な佛様がある、自分の體の佛様を拜んでゆかなければならぬ、之が主觀的信仰です、之れで無ければ精神の獨立は出来ませぬ、學問を仕やうと云つても吃度學問の出来るだけの性質を持つて居る、農業をなさるお方が春になつて稻を植えるもさうです、稻を植えたならば吃度秋には實ると云ふ信仰があれば必ず育つ、五ヶ月か六ヶ月の後の事を確信して田をお作りになる、之が皆な信仰である、稻を植えても何うであるやらと云ふ様な事では信仰でない、此世の中は夢の世の中である、ケチ／＼やつても仕方が

無い好い加減な事で胡麻化して通らうとする、それはいけない、佛法は假りの世ぢやと云ふからとて此世を粗末にして何にもかも捨てよといふのではない、「假りの世を假りの世ぢやとてあたにすな假りの世なれどものが世なれば」斯くの如くに吾々の心の内に立派な佛があると信じて居つて、此心の佛を磨き出してゆく之が主觀的信仰であります。

客觀的信
仰

次に客觀的信仰とは吾々を助けて下さる吾々の御手本となるべき結構な佛様を向ふへ立て、有り難く御歸依をして行くが客觀的信仰である一般の宗旨の上に配合すると淨土宗とか眞宗の如き阿彌陀様と云ふ有り難い佛様を向ふへ立てる之が客觀的信仰である、禪宗の如きは自分の心の佛を悟つてゆく方だから主觀的信仰の様に見える、そこで禪宗は自力だと云ふ説がある、外の人にはさう云つてをる、所が禪宗は自力の宗旨ではない、それでは他力か他力の宗旨でもない、それぢや途中の合ひの子か、さうでもない、客觀的の佛様と主觀的の心と云ふものが合せ鏡の様に成つてピッタリ合つた所が禪宗の安心であるから之を入我我入の法門と云ふ、喩へて見ると茲に結構なお手本を

展げてゐて手習をする、お手本がたよりであるからお手本に依る故に客観的信仰だ、さうして其手本に依て習ひ自分の手を以て習ふ目的は何うかと云ふと自分に字が能く書ける様になるが爲であつて、お手本を見るが目的ではない、當り前五本の指を運用してお手本の字よりも立派に書きたいものだと言ふ信仰があるからお手本と異らぬ字が書かれる様に技倆の現はれた所で終に目的が達せられる、其時は佛であるが、自分の手だけで出来たのでなくお手本と自分の精神と一致するからである、即ち自力と他力と一致したのが禪宗の安心である、御開山のお語に「わが身をも心をも放ち忘れて佛の家になげ入れて佛の方より行はれて之れに従ひもて行く時力をも入れず心をも費さずして生死を離れ佛となる誰れの人か心に滞るべき」自分の體も自分の心も打ち忘れて佛様の家に投げ込んで總ての行ひが自分の行ひで無くて佛様の行ひと成つて佛様の方より行はれてゆくと始めて信仰になる、信仰は何うしても斯うて無くてはいかぬ、佛様に向つて御拜をする、其時は有り難いと思つて涙を流す位でないと思つて佛様の心が吾々には乗り移つては來ない、淨土眞宗杯は斯云ふ御經驗が有りますが、何の宗旨

でも信仰と云ふ上から云ふと一度は我れを忘れて佛様の懐の中へ投げ込んでしまふと眞實涙の出る程有り難いと云ふ信念が起つて其信念の力に依て佛様のお徳が吾々の腹の中に染み涉つてゆく、其時は我れが佛様やら佛が吾れやら微塵ばかりも隔ての無い所で始めて佛敎の信仰が確立する、此所の味ひは容易に云ひ現はしにくい、例へば子供が親の顔を見ると自然に有り難くなつてニッコリ笑ふ、故らに笑ふのでない、理窟を離れて居る、之れは直覺的良心の作用で、笑はふと思はないでも阿母さんやお父さんのお顔を見るとニコツと笑ふ、それは何ういふ意味を以て笑ふかと云ふと向ふの心と自分の心が自然に無線電信を掛けた様に感應してゆくから自然に此笑が現はれるのである、親子のみならず夫婦の間も亦其通りである、此心の現はれた時は亡くなられた御先祖に對しても自ら頭が下つて有り難く感ずる、東京では唯今第一流の女子敎育家として知られたる山脇房子女史は出雲の地に生れた人ださうですが、此人は母親に早く別れてお父さんの敎育を受けたものです、其お父さんの敎育が身に染みて今日の人格を作つた、其一例を擧げると山脇房子さんがさう云つて居る、自分が學校に通つ

て居る間に試験日がある、試験が済んで内へ歸ると早く試験の様子が聞きたいとお父さんが門の外迄迎ひに出てゐる、向ふから房子さんが歸ると嬢やと云ふ次ぎには今日の試験は何うであつたとお父さんが尋ねる、(嬢)お父さん喜んで下さい今日の試験は能く出来たと云つて先生から賞められましたと云ふ、お父さんは餘り嬉しくて嬉しくて泣かれる、それは好つたと云つて娘の手を取つて御先祖のお佛壇の所へ往つて娘を傍へ置いてお父さんは丁寧に頭を下げて、御先祖様も喜び下さい嬢は試験が善くて先生からお賞めを戴いたと云ひますと云つて、生きて居る人に物を云ふが如く頭を下げてお父さんが云はれた、其事は今尚ほ寝ても覺ても忘れられぬと云つて居る房子さんの本當の信仰はお父さんが御先祖に對する信仰が乗り移つたのである、神を祭るところと神在すが如しと支那人も云つて居る、昔よりして日本は信仰國である、神武天皇が大和の橿原に於て祭りの庭を築かれて皇祖皇宗の靈を御祭りに成つた、御先祖の御靈を祭るのが即ち御先祖に對する孝行であると仰せられた、國家を治むるも御先祖に對する孝行である、一般の國民は即ち御先祖の國民である、して見れば其御先祖の國民

を治めてゆくが矢張り御先祖に對するお祭りである夫れ故天下の政治をまつりごとといふ皆さんもさうです、今日はお新月である、お命日であるからと云つてお經を讀み或は精進をする、それも一つのお祭りには相違ないが、平素に於て一軒の家庭を立派に治めて子供は立派に教育して子孫の繁榮を圖る之が一軒の内のみならず、天皇陛下は御信仰が深く在らせられるとは御製にも「めに見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ」とある、神佛は目には見えないが神佛の心と自分の心と一つに成つた所で誠心が現はれるとの仰せである、又 皇后様の御製にも「人知れず思ふ心の善し惡しを照しわくらん天地の神」と仰せられて有ります、今日の吾々も佛様に向つて斯くの如き信仰を以て、佛様は歴然として在しますものと信じて、佛様に徹底御歸依を致してゆくと云ふ所で、始めて佛様の御慈悲と智慧の光りが此胸に輝いて來る、佛様は如何なる御方であるかと申すと、智徳圓滿な御方が佛様である、この智慧と慈悲の圓滿なる佛様に御歸依をすると、その佛様の御悟りの光りが吾々の胸の光りと一致するのである。

そこで信仰の標準は何うかと云へば佛法僧の三寶を以て信仰の標準とする、先づ佛様に御歸依をする法に御歸依をする、法とは何であるかと云ふと吾々が天地の眞理を諦め道徳を行ふ上について佛様が色々御説きに成つたものであるから御念佛も御題目も坐禪も法である、佛が法を御説きに成つたのは要するに吾々をして迷ひを轉じて悟りを開かしめ、苦しみを離れて樂しみを得せしめ、惡を止めて善を作さしむると云ふが法を御説きに成つた目的である、之を吾々の智情意の三つの上から申すと智慧の方から云へば迷ひを轉じて悟りを開き情の上から云ふと苦しみを離れて樂しみを得る、意志の上から申すと惡を斷じて善を行ふ、之が佛法の目的である、佛様が有り難いと云ふ以上は佛様の教に従つてゆくといふことが大事である、次ぎに僧と云ふのは法を傳へて下さる方が僧である、日本に於て云へば各宗の御開山などは皆な僧である、皆さんは何うであるか知らんが、私共は禪宗流に眺めて見ますと、弘法大師の十住心論であらうが、日蓮上人の立正安國論であらうが、親鸞上人の教行信證であらうが、何れも釋尊が教へられた有難い御法を吾々に御傳へ下さつた御慈悲の上から現はれた

法門である、一つとして餘所の宗旨の様な心持は致さぬのである、なぜかと云ふと前に申した主觀客觀といふ二つの法門から眺めて見ると、主觀的で無ければ客觀的、何ちらか此二つの中に這入つて居る、どの宗旨の御開山の御示しを見ても皆な同じき事を吾々に示されてある、唯形が變つて居る丈である、古人の歌に「雨霰雪や氷とへだつれどとくれば同じ谷川の水」と有る如く其宗旨に皆特色があるから形の合併は出来ないが、精神の歸着する所は唯一つである、夫れを社會に應用すると云ふ點に至つては同じである、日本の國家を本位にして行く時は弘法大師が高野山を御開きに成つたのも、上は國家の爲めにするに仰せられてある、傳教大師が比叡山を開かれたのも鎮護國家の道場、王城の鬼門除けと云ふ所から出來て居ります、支那では鬼門と云ふ事を云ひますが、印度には鬼門といふ事は有りませぬ、東北の間即ち長の方には吾々に害を加へる所の惡魔が有ると云ふのを支那の畫家が之を形に書いて見たいと思ふて頭に牛を付け腰の方へ虎を付けたから牛虎になつて鬼の姿が出來た、それから之を鬼門と申して居るが、本當の恐ろしい鬼は何所に在るか云ふと、吾々の腹の中に在る、

古歌に「恐しき地獄の鬼を尋ねれば邪見の人の胸にこそあれ」邪見の人の胸には牛も虎も居る、地獄の鬼は吾々の胸にある、佛法は何方から云つても同じ事です、私共は親鸞上人の書かれた物を見ると感涙を禁じ難い、又蓮如上人の御一代の御文章なんといふのは私共は毎度拜見致して居りますが、實に有難く感ずる、同じ佛法の中に在つて彼是と議論をするのは所謂兄弟喧嘩である、議論は誰が負けても釋尊の耻です、御維新前迄は兄弟喧嘩をしても宜かつたかも知らんが、今日の我が日本は世界の一等國と成つて萬國に雄飛してゆかなければならぬと云ふ一大事の場合に於て、兄弟の内て彼是云つて居る様ではいけない、夫であるから一面に於ては宗旨の特長を發揮すると、同時に亦他面に於ては大同團結して國家の爲めに應用して行かんければ吾々宗教家としては相濟まぬ、それには大に皆さんの御助力を得ねばならぬ、お寺杯は成るべく社會教育の機關に供して青年はお寺へ往つて青年の道徳を修め、婦人はお寺へ往つて婦人の道徳を修めてゆく、必ず佛法の話ばかりには限らぬ、各方面の方々のお手傳に依て、惣掛りて以て國家の實力を養つて行かんければならぬ、何方から云ても

同とて、日蓮上人も親鸞上人も皆有り難いのである、親鸞上人が越後へ流されて行かれた時に、自分が此所へ流されて來なければ此土地の人を濟度する事は出來ない、思ひがけなくも此邊鄙の人に佛法の御縁を結ばしめる事が出來たのは偏に御師匠法然上人様の御かげであるとして喜ばれた、親鸞上人が越後の柿崎と云ふ所へ御通り掛りになつた時は、折しも五月雨の時節、向ふを見ると一筋の川があつて、濁り水が滔々と流れて居る、固より渡し船は無し、徒足渡りするにも深きは解らず、殊に日は最早や暮れかゝつて居る、幸ひ其邊に扇屋といふ家が在つたから、其家へ一夜の宿を頼まれた、然るに此家の女房と云ふが邪見な者で、殊に坊さんは大嫌ひだ、そんな方は泊められぬと云つてピツタリ斷つたのです、マサカ一宗の開祖とも仰がるゝ名僧とも知らないから、何うしても泊めて呉れない、夫ぢや内庭の隅でもよい、夫れもいけない、それでは軒の下をと云はれると、軒の下迄貸さないと云はれないから、軒の下を貸して呉れた、上人は軒下に於て雨に降られながら其邊にあつた石を枕に眠らうと致されたが、吹き荒む五月雨のとばしり、風の吹き廻して、法衣も何もズブ濡れとなりて、

眠る譯にはゆかぬ、其時上人が思ひなざるには、斯う云ふ所て一夜の宿を借るのも之も前世の因縁であらう、斯る所に在て信心を凝してこそ昔の佛様や祖師方が吾等の爲めに御苦勞なして下されたお跡を慕ひ參らするとも出来ると喜びつゝ、一心にお念佛を唱へて居られた、彼等は親鸞上人の斯も偉大なる信念に感激したと見える、彼の扇屋の亭主が飛んで出て、上人の手を執つて家の中へお入れ申して、焚火をして濡れたる衣を燥かし、且つ上人へ今迄の無禮をお詫申上げた、雨に降られ風に吹かるゝのも厭はず、剩へ宿の無きのも恨みとも思召さず、却て有難いと云つて喜んでござると云ふは、凡人ではないと云つて、今迄は佛法に因縁薄き夫婦の者が遂に上人の徳に感じてお弟子となり、後には非常なる大信者となつた、其時の上人の歌に「柿崎にしぶく宿をとりければあるじの心熟柿とぞなる」と詠まれたのである昨日迄は注意人物だと云はれた様な人でも、噫悪かつたと云ふ懺悔の心を起せば、一足飛びに随分立派な人物にも成れるのである、古への祖師方は何れも斯う云ふ艱難辛苦を遊ばされたのです、佛法僧の三つは元來一つである、戒法の十六箇條の中に於ても歸依三寶と云ふ

て此歸依三寶の信仰は取り別け大切である、佛法僧の三寶に歸依する之を信仰門と云ふのである、若し此信仰が無つたならば、佛法は全く無味のものとなる、坐禪をして居ても先づ第一に信仰を起すべしと云ふが坐禪の法です、所謂一部分の戒法を保つて坐禪をする、佛法僧の三寶を信仰してゆくと終には自分の體が佛法僧の三寶になる、心を調べて佛様を拜んで居るといつの間にか自分が佛様に成る、天桂禪師の歌に「佛とはたが結びけんしら絲のしづがおだまき繰りかへし見よ」妄想とか煩悶とかと云ふ様なものがあるから夫れに縛られて居る、心の内に一つの悟りが現はれると迷も何もなくなる迷ひが無くなれば此體が其儘佛様と云ふことになる。一軒の家でもさうです、家内が不和であれば何と無く縛られた様な感じがする、然るに家内中が打解けて互にニコニコ笑ふ様になれば夫れが直ぐに佛様である、村の内が治まらんで邪見の角を以て互に突き合をするそれが直に地獄である、然るに一村が擧つて能く和合する時は迷ひの繩を断ち截つてしまふ、さうすると佛様の功德に依て御互の腹の中に法と云ふものが具はる、さうすると自ら御互の腹の中に御開山方の魂が這入る、僧は無

諍と云つて和合の徳が現はれる、御互に無理我儘な量見を離れるのが僧である。「我意我慢痴痴がまゝぞ地獄なれ堪忍すれば今日も極樂」我意我慢我儘と云ふ心の諍ひが無くなつて精神が平に成つてゆく、其時は吾々に御開山様の魂が這入る、何うか此世の中が斯う云ふ風になつてゆきたいものです、そのみならず信仰は大歡喜の念を生ずる、即ち嬉しいと云ふ心が起る、古人の歌に「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」是が信仰です、何ういふ譯と云ふ事は知らねども、唯何となく嬉しくなつて今日の人世が誠に快活に送つてゆける、信仰の有る人は心に樂しみがある、信仰の無い人は何か自分に一つの目的が達せられぬ時には非常に心が苦しくなる、信仰ある人は心に綽々として餘裕がある、さうなると吾々の體がソツクリ佛様の本體で、活きた御經文と成り、活きた御袈裟となる、大體御袈裟と云ふものは和合を現はしたもので、長い切れ短い切れ大きい切れ、小さい切れと色々なものを縫ひ合せたのが御袈裟である、皆さんの腹の中に本當の和合の徳が具つて信仰が出来ると皆さんの心が一つの御袈裟になる、吾々の一軒の家の内には色々な人が集つて居る、

十人十色で、酒嗜きな人もある、餅嗜きな人もある、氣の長い人もあれば氣の短い人もある、御互が勘忍を守つて和合と云ふ事を主としてゆけば喧嘩口論の波風も無く、能く家が治つてゆく即ち一枚の御袈裟の形になる、御飯でも私に軟いが好いとか硬いが好いとか各々自分を本位として勝手氣儘を云ひだしたならば御飯一つも満足に食へるとは出来ない、十人居るからと云つて十通りに炊く譯にはゆかぬ、設ひ子供と老人と云ふ極端と極端との人が集つてゐても、一同が膝を並べて團欒として家庭の樂しみが得られる、其時は一つの御袈裟が腹の中に掛つて居る、どうかみなさんはタトヒ頭は剃らなくとも心は自ら僧の姿と成つていたゞきたいのであります、古人の句に「剃りたきは心の中の亂髪つもりの髪はとにもかくにも」とある通り、皆さんの腹の中に和合の御袈裟を掛けていたゞいたならば一村が治らぬ一軒の家が治らぬと云ふ事はない、其所に至ればタトヒ眼前に生死といふ大問題が現はれても吾れは死なないと云ふ生死透脱の根本原理の上に心を治めて居りますから互は如何なる場合に臨んでも少しも心を動さぬ、國の爲め人の爲めには出來得る限りの慈愛の心を運んで佛様

の徳を現はしてゆけば、心が佛なるばかりでない其人の手も足も皆な佛様の働きになる、之が信仰門に於て現はれたる様子である。

三 誓願門

誓願門と云ふ方から云へば第一が攝律儀戒第二が攝善法戒第三が攝衆生戒といふのであるが、一々名目について御話をすると却て六ヶしいから、誓願門の意味の上から申します即ち止惡、作善、利生、之を三大誓願と云ひます、誓願とは志してある、志しが無ければ何事も出来ない、必ず之を遂げやうと誓ひを立てるが誓願である、華嚴宗の大徳にして鳳潭と云ふ人が有つた、十六の齡の事であるか、比叡山に於て天台四教儀と云ふ書物の講釋があるので、京都の六角より三里の道を毎日聽聞に通つて居つた、固より六ヶしい書物であるから初めの中は聴く人が百人計りもあつたが、段々人數が減つて百人が五十人になり五十人が三十人になり十人となり五人となつた或る日のこと鳳潭たゞ一人來たのみで外の人誰も來ない、スルト講釋をする先生の方でも張

合が無いから今日は前一人であるに依て書物の講釋は止めやうては無いかと云ふと鳳潭が折角來たものであるから何うかさう仰しやらずに講釋を願ひたいと云ふと、(先生)斯ういふ風では明日もお前一人位であらうから今日丈は講釋をするとして明日からは止めやうといふた、(鳳潭)イヤさう仰しやらんて是非講んでいたゞきたい、私は明日から澤山に聽衆を連れて參ります、(先生)さうかそれぢや講釋を仕やうと云ふので鳳潭は約束をして京都に歸る、先生は翌日には聽衆が澤山來るかと思ひの外相變らず鳳潭一人であるから聽衆を連れて來ると申したが一向來ないでは無いかといふと、(鳳潭)今日は澤山連れて參りました、(先生)何うした其連れの人、(鳳潭)ハイ唯今出しますと云つて袂から出したのは小さいな伏見人形である、其所へ彼れ三十ばかりも出した、サア先生は怒つたの怒らないの人を馬鹿にして居ると云つて大變な立腹である、鳳潭が云ふには聴く氣の無い者は幾等來ましても唯頭を其所に並べて居る迄でありますから此伏見人形も同じ事では有りませんか、頭數さへ居れば講釋をなさるなら、居睡りもせず軒もかゝぬ人形の方が宜からうと思つて人形を買つて參り

ましたと云つた、先生も此語に感じて之れから後は華嚴の鳳潭一人の爲めに滿講迄講釋をしたのである、鳳潭は華嚴宗の中興と云はれた程の人であるが、斯くの如くも互が志が堅固であれば何事も必ず成るものです、「志正しければ事皆成る」若い人杯も必ず自分は爲し遂げやうと云ふ志が無ければならぬ、お互が志を立てて行くには此世一代に出来んければ生き替り死に替りと云ふ楠正成公の如く七度生き替り死に替りしても朝敵を亡さんと云ふ志を起して盡未來際誓て之を成就させたいと云ふとが三箇條ある、之を三聚淨戒と云ひます。

止惡

第一は止惡 悪い事は誓て止める 志、之は三業清淨と云ふ誓です、即ち三業とは身口意の三つの業です、此三つの上が奇麗になつてゆくが戒法の根本で有ります、悪い事を止めるは必ずしも手足の上で悪い事をしないのみでなく、心の内にも悪い量見を起すまい、口でも罪になる語を述べまい、身體の上にて罪になる様な事はせまいと之を朝な夕なに心掛けてゆく之を止惡と云ふ、惡を止めると云ふは消極的の道徳である、己れに克つて禮に復る之が止惡といふ意味です、吾々の心には時々色々な迷ひ

作善

が起る、それをウンと抑えて悪い量見を起すまい、悪い事は云ふまい、悪い行ひは致すまいと、非常な勇氣を以て心を抑えてゆく、之が一つの修養です、今日は此修養が最も大事であらうと思ふ。

第二は作善 善い事を行つてゆく勇氣である、悪い事をしないばかりでなく進んで善い事をせねばならぬ、善い事も行はうと思へば乾度行はれる、小さな子供が父さんや阿母さんに御世話に成つて居る間からでも善い事は出来る、人の知らない中に善い事をする之を陰徳といふ、支那の老子は含徳と云つた、即ち内に含んで外に現はれない徳之が陰徳である、例へば庭が汚れて居ると人が知らん内に掃除をして置く、今日の青年の人杯に此陰徳が發達致したならば美しい人間が出来てあらうと思ふ、人が寝て居る時分に自分は人知れず起きて勤めをする、之は善い事であるが仲々六ヶしいものです、日曜日などに勉強しても賞めて呉れない、なんだ馬鹿らしい骨を折つても賞めて呉れない、つまらない、此先の日曜には朝から寝てやらうと云ふ様な考が起る、腹の中から精神的に務める事は六ヶしい、人に賞められぬ方が却て有り難いと

云ふ考で、隠れても善い事を仕やうとして自然的に善を行つてゆくを作善の徳と云ふのです。

第三は利生 自分が悪い事を止めて善い事を行へばそれで宜いかと云ふにさうでない、利生と云つて世の中の生きとし生けるものは悉く濟度して利益を與へる、人間は云ふに及ばず鳥畜類に至る迄愛護をしてゆくと云ふが利生の志である、之も出来ぬ事は無い、どんな人でも志を起せば吃度出来るに相違無い、西洋あたりには感心な話が澤山ある、林董氏が先年英吉利へ公使として赴任せられて御夫婦共にお出になつた、所が奥さんが思ふには兎に角大日本帝國の全權公使として英國の倫敦に駐在して居るからは餘り人に笑はれる様な態度をとつてはならぬと、平素でも美服を着けていつ何時人に見られても耻しくない様に支度をして居て、倫敦市の下女を一人使つて居る、其備はれて来た女が時に奥さんの顔を變な目附をして見る、奥さんも氣持の悪い様な女である、あれは目が悪いのか知らぬ妙な風をして妻を白眼で居るがと思ふて居ると、三日ばかり経つと女中が奥さんの所へ往つて頭を下げた、甚だ異な事

を伺ひますが貴女様は何所か御體に悪い所は有りませぬかと云ふ、(夫人)イヤ何所も悪い所はない、妾は此頃は極めて健康だ、(下女)それならば安心を致しました、妾が御奉公をしてから今日迄非常に案じて居りました、(夫人)なぜお前はそんな事を云ふか、妾が御飯を食へるのも知つて居るであらう、(下女)何だか存じませんが御奉公をしてお傍に三日間程居りますうちに貴女の様子を斯う眺めますに何時でも働かずにジツとして居てる、何時かお悪い所でも有りますのかと思つて時々御様子を眺めて居たのであります、(夫人)妙な事をお前は云ふなと云はるゝと(下女)此英吉利の人はどんな身分の高いお方でも働かぬ人は有りませぬ、誰でも手足の動く中は働きます、それに貴公様は何時もお人形の様にして居てなさるから御病氣が知らんと思ひましたと云ふた、それから段々英吉利の状態を見ると中流以上の人といへども仲々能く働く、餘り品をつくつて居たら病人だと思はれたと云ふ事である、して見るとどの様な御身分のお方でも之を仕やうと思へば夫々分に應じて事をすると云ふが現代の世の中に於て吾々の最も必要なる點であらうと思ひます、東京あたりの人の

状態は然うでない、奥様だと云ふと遊んで居る、好い衣服を着て三度／＼上膳据膳で何も仕ない、若し其近邊にお役所へでも出るとか學校の先生をして居る人があつて身分は高くてもお金は澤山無い内では女中が唯一人位であるから、時としては先生の奥さんが豆腐買ひに行く、さうしてお隣りの奥さんは澤山の人を使つて上膳据膳寝夜具の上げ下ろしまで人にして貰ふ、そんな人は仕合せである、美しいと云ふ様に日本の都會の一部分は全く働かず暮して居る事を望んで居る様に見える、何うしても活動的に出来て居らぬ、所が誓願の上から云ふと倒れても已まない死ぬる迄は働いて自分の悪い事許りぢやない社會の悪い事を止めやうと思ふ大活動をせねばならぬ、善い事をするにも自分一人でない、天下と共にしやうと思ふたならば善い仕事を經營せねばならぬ、自分は一身を擲つても國家社會の爲めに盡くさうと思ふ、利生の誓願の力に依つて死んでも死にきれない程にお互人類社會の爲めに盡くしてゆかんければならぬ、昔し常従と云ふ老子の師匠が、最早や死なうとする際に老子を始め門下生の者の爲めに最後の教訓として齒と舌との關係を説いて處世上の秘訣を示した、齒

は堅さが故に早く落ちる、舌は柔かなるが故に永く存すと云つて、吾々の齒は全く堅い物であるから、却て早く落ちて無くなるが、舌は柔かであるに依て永く保存する、さうして舌は多くの物に接して厭はぬ、貴い物が來ても賤しい物が來ても、皆な舌の頭に戴いて敬つて居る、色々の物を都合能く調和して、自分の物とせずして皆な奥座敷の胃の腑に送つてしまふ、それと同じく我々は常に 天皇陛下の御爲め御國の爲御先祖の爲に吾々が平常行つて來た有らゆる善い事は悉く國家社會の爲めに盡すべきである、之が利生の徳である、常従と云ふ先生は一枚の舌を以て後世の手にせよと云つた、流石に老子の師匠丈ある面白い事を申したものである。

曹洞宗の本山總持寺の御開山常濟大師と云ふ御方は平常心是れ道と云ふ公案を聞いて悟りを開かれた、(常濟)私 は平常心是れ道の意味が解りましたと云ふと、師匠さんの徹通禪師が然らば其悟りを述べて見よと仰しやると(常濟)黒漆の崑崙夜裡に走ると御答になつた、即ち黒い漆で塗つた玉が然も闇の夜に走つたんだか妙な辭ですが是は二つの意味を以て見るとよくわかる、吾々はマウ心に於て少しも迷ひが無い、自分の

心は本来無一物と云ふ境界に成る、之が達磨宗であります、昔し或る僧が山寺へ行き
 ましたら山寺の和尚が折角訪ふて呉れたが別に御馳走も無いと云つて詠んだ歌に「何
 をかなまらせせばやとは思へども達磨宗には一物も無し」と詠むと、訪ねて来た坊
 さんが「もとよりも賜はらざるものたまふを本来空の妙味なりけり」と返歌をしたと
 云ふが、あらゆる執着の念の無くなつた上から働いて行くと云ふと丁度闇の夜に鐵砲
 丸が飛ぶ様なものであると云ふ意味とマウ一つは含徳即ち陰徳の意、我々が働いて居
 て面に現はさぬは心の働き、此二つの方面から此も辭を御覽になれば能く解る、禪宗
 の本分から云ふとマウ一步進んだことがあるが、それは後廻しにして置きます、表面
 から云ふと無我の働さをしてゆけばそこに於て外部を飾らぬ精神的の活動があると云
 ふのです、併し師匠さんは尚ほ策勵を加へて「未だ更に道へ」と仰せられた、即ち其
 説明では未だ足らぬから更に述べて見よと云はれた、すると常濟大師が「茶に遇ふて
 は茶を喫し、飯に遇ふては飯を喫す」と御答になつた、お茶の時はお茶をいたゞきま
 す、御飯に向へば御飯を食べる、親に向へば孝をつくし、君に向へば忠義を盡くす、

妻たる者は夫に對して貞操をつくし、夫たる者は夫の守るべき務めを盡くす處に自
 ら本来無一物と云ふ天地の大道が現はれて来る、古今不變の大道が現はれて來なけれ
 ばならぬ、夫れを聞いて徹通禪師が大層お喜びになつて「子向後當に洞上の宗風を起
 すべし」と御譽めになつた、お前は着實だ、空見識ではない、それで無ければ眞の佛
 法でないよと云つて、徹通禪師が證明なされた、して見ると吾々が誓願を起しながら若
 し誤つて悪い事を致したならば自分の體に一つの疵が附いた位に戦々競々として恐
 れ、善い事を行つたならば人の賞める賞めないに關らず百味の飲食を食べたよりも喜
 んで善に向て歡喜の心を起し、人世を眺めて憐みの念を起し一切衆生を見るに同胞兄
 弟の心を以て對し、大悲の行ひをして始めても互の一舉一動が佛の大精神と成つて現
 はれる、そこで此誓願門を示しになつてある、併し何う云ふ形に善を行つて、惡を
 止める様にすべきかと云ふのは即ち次の行持門に於ける十重禁戒であります。

三 行持門

されば其の行持門に於ける十重禁戒のことを御話して曹洞宗の宗義の大要を結了いたしたいと思ひますが、此處で自ら此の宗旨の組立方が大略御解りになるだらうと思ふ、即ち曹洞宗の宗義の組立方は修證義を御覽になつて居るお方は御承知であるが、四大原則と唱へて、四箇條に別れて居ります、併し是れは曹洞宗の信仰箇條とは云ひ乍ら見様に依ては佛教全體に通じた信仰箇條と云つても宜しい位である何れの宗旨といへども此信仰箇條に従つて毫も衝突は來たさぬのである、其の四大原則とは懺悔滅罪、授戒入位、發願利生、行持報恩です。

懺悔滅罪は佛教全體に通じて必ず行ふべき大切な條件になつて居るから縦ひ曹洞宗のお方でないにしても此懺悔滅罪と云ふ事は御承知を願はんければならぬ、懺悔とは能く世間で申す悪い事をした時にお詫をするを、私は懺悔を致しますと云ふが、懺悔とは印度の語で懺摩と云ふ、之を翻譯して悔過といふ、即ち過を悔ゆると云ふ事です、吾々は平素の行ひについて見ると種々な過失がある、自分の精神を願ふと精神の上に於ても色々の缺點がある、其精神上の缺點行爲上の過失を自ら悟つて行ひを改

める、過て改むるに憚ると勿れてあるから、悪い量見を持つたならば徹底後悔をしてア、濟まない事をしたと云つて心を改めてゆく、悪い事を致した悪い量見であつたと自分で自分が愧かしいと思ふて斷乎として行ひを改めてゆくが悔過と云ふ斯様に懺摩と悔過との中から一字づゝ取つて二つ合せて懺悔と云ふ名をこしらへたのである、之れは支那的の語である、所がお互に悪い事をした事をあやまらうと思ふ、其悪い事とは何時したて有らうか、中には別に悪い事をした覚えはないと云ふお方が有るかも知れぬのであるが、吾々の今日の状態をよく願ふに吾々の一身はどんな立場に立つて居るで有らうか、お互は神にも佛にも變らぬと云ふ結構な心、本來の面目を具へて居り乍ら神と成るとも能はず、佛とも成るとも能はず、考へて見れば吾々の心は淺ましい點が多い、然うして世の中の状態と云ふものは又缺目が多い、其苦しきは仲々免れられぬ、如何なる英雄豪傑でも世の中の苦しみを逃れるとは出來ぬ、彼のナポレオンと云ふ様な世界一と云はれた豪傑でも、後には鳥流しに遇てそこに於て死んだ、其死に際に何と云つた、自分が今日迄にした事を振り返つて見ると皆な砂上の樓館

である、砂の上に建てた家の様なもので、大變な豪い事をした様であるが、風が一度吹けば忽ち元の野原になる、サツパリ役に立たぬ、所が西洋で云へば基督の如き東洋で云ふと御釋迦様の如きに至つては別段に目立つた御仕事は無いが、三千年の今日に至る迄天下の人が手を合せて拜む、之は堅牢なる岩石の上に建てた様なものである、實に人生は夢の如きものであると云つて、ナポレオンは涙を吞んで死んだのである、世の中には苦しみが多いと佛様が仰しやつたのは實にさうである、全く苦しみが多い、苦しみが多いに依て苦しみを免れる事を望んでゆかなければならぬ、自分の一身の上から云ふと一身上の苦しみを離れて樂しみを得る、又世の中の上から云ふと世の中の苦しみを濟ふて世の中をして幸福なる世界快樂なる世界に進ましめる言葉を換えて云へば國運の發展と云ふことになる、今日の日本は世界の一等國と云ふ看板を持つて居りますが、實際に日本國の狀態を考へて見たならば仲々満足は出來ない、改良すべき事柄は數限りも無く有る、又進んで取るべき仕事も澤山有る、縦ひ之が三十年五十年の後に至つても決して之で安心だといふとは出來ないが我國の狀態である、お互は

現在の有様に満足をせずマウ一步進だ所迄行かうといふ理想を持って居る、所が佛敎に於ては三世因果の道理を以て惑、業、苦の三つを説く、苦しみは何に依て生ずるかどう云ふと業に依て生ずる、業とは我々の心の業、身の業、口の業、此身口意の三つの業に依て一つ勢力となり原因と成つて今日の苦しみを受ける、尤も惡業は苦しみを生ずるが善業は樂しみを生ずる、一軒の内でもさうです、あの人は年を取て子供の爲めに非道い目に遇ひなされた氣の毒な人であるといふ、考へて見ると子供に對する教育が充分に届かなかつたと云ふ業が残つて居る、何故教育が届かなかつたと云ふ原因を調べて見ると、物の道理を正しく見て夫を行つてゆく事が出來ない一つの惑ひがある爲めに、子供に對する教育が不充分であつた、夫れが爲めに年老ひて難儀をする、即ち惑ひと云ふ煩惱に依て業を作り業に依て苦しみを受ける、斯云ふことになる、又生れ乍らにして非常な苦しみを受けて居る人もある、之は前生の宿業に依るのである、世の中は仲々思ふ様にはならぬもので、古歌に「思ふこと一つかなへばまた二つ三つ四つ五つ六つかしの世や」苦しみの世の中であるから、佛様は何うかして此人世を濟つてやりな

いと云ふので難行苦行をなされた、此世界は五濁惡世で淺間しいと云つて死んでしまつてはいかない、淺間しい世の中に生れたのは決して世の中の罪でない、自分の方に在る苦しみは業に依て受けるが、其業は必ず此世ばかりで無い、お互は此世に於て惡業を造らぬでも前々世に於て迷を起し、様々な業を造つて今日の苦みを受けて居る、其苦みの結果として神にも佛にも變らない精神を具へて居り乍ら其精神を現はすとが得意なと思ふと非常に愧かしくなる、お託を仕やうと思ふてもお託の場所が無い、お託の相手が無い前世の事をあやまられても誰も勘辨してあげると云ふ人はない、ソコで此宗教の必要なる所がある、吾々は佛様に向て過去の過去際より未來の未來際に至る迄三世を一貫して吾々衆生の爲めに艱難辛苦をして下さつた佛様に向つてお託をするのが懺悔の法である、お互の心は穢れて居る實に愧づかしい心であつたと云ふ事になると自づと心が清められて奇麗になり、お互が縦ひ悪い行があつても悪い事をした悪い量見であつたと一念悔悟をすればマウスツカリと清められる、今迄の事を徹底後悔して誠に愧かしいと思ふと將來に罪を作る根本が無くなる、根本とは迷であ

るが、其罪の根本が清められるに依て罪咎がスツカリ無くなる、ツマリ罪咎の根だやしてある、丁度波と風との關係であつて、風の爲めに波が起る、風は静つてしまつても暫くの間は波は動いても、風といふ波を起す根源が無くなれば自然に波も静まる、一休和尚が住吉神社に參詣して詠まれた歌に「來て見ればこゝも火宅のうちなるになど住みよしと人は云ふらん」此世は何所へ行きても無常と云ふ火が附いて居るのに、ナゼ住吉と云ふかと云ふと、住吉明神の返歌として「善し惡しと思ふ心を振り捨て、たゞなんとなき住めば住みよし」自分の心の迷を捨てしまへば、何所に居ても住吉である、それであるからお互は佛様を信仰して罪咎の根本を斷ち切つて再び罪を造らぬと云ふ清淨な心になれば、縦ひ今日では多少の習慣が残つて居ても迷ひと云ふ罪の根本さへ滅びてしまへば二たび迷はない様になる、吾々は何うか此懺悔心を起したいものである、懺悔心と云つて別段に變つた事は有りませぬ、佛様に向て一心に吾々の心の穢れて居るをあやまる、吾々は心の内に始終苦しみがある、身體の上にも苦しみがある、之は親の罪でもなし他人の罪でもない、皆な前々世からの因縁である、斯

くの如く苦しみの多い身の上であるから何うぞも助けを願ひますと云ふ信仰心が起ると、同時に心が清浄になる、心が清められた所で佛様から御戒法を受ける、之を授戒入位と云ふ、戒を受けて佛様の位に入て佛の御弟子となる、即ち第二の佛になる、佛になると云ふと何んだか心細い様な気がして、今から佛様に成つてはたまらぬと思ふ方もあらうが、佛様に成るとは死ぬる事でない、前にもお話をした通り解脱です、即ち吾々の智識と道徳の一番の根本基礎をつくつて精神に於て諸々の苦しみを離れるのが佛様である、明治十年頃に亡く無つた京都に蓮月といふ尼僧があつた、此人は三十三歳位迄は非常に幸福な家庭で子供を四人迄育て楽しく暮して居るうちに僅に三年程の間に四人の子供に離れ、又良人に死なれ、剩へ父親に迄死なれたのであるから、人世のはかない事を思ひ、非常に精神に苦痛を感じて、或日の如きは父の墓前に於てとう／＼一日泣き暮したとさへあつた、其時の歌に「たらちねの親の戀しきあまりには墓にねをのみ泣きぐらしつゝ」、それから後は幸ひにして佛法の教を聞いて段々信仰をして、後には岡崎の里に菴を結び名を蓮月と改めて尼僧と成つた、其頃の歌に「岡

崎の里のねざめに聞ゆなり北白川の山ほとゝぎす」、佛教に依て安心が出来たから追々心が收つて斯う云ふ歌を詠む様になつた、吾々が此自然界の壓迫を受けると何うしても精神を惱ます、其時に自分が諦めをつけますと安心が出来、佛法に依て此安心が出来たならば、縦ひ昨日迄は悪人と云はれ邪見の人と云はれ愚痴の人と云はれた者でも一足飛びに佛様の御弟子に成つて佛様の御仲間入りが出来、之が授戒入位である、戒は前にお話をした通り十六箇條あるが、之れ文を受けて固く持つてゆけば直ぐに佛様である、大體戒法の徳は吾々の心に具へて居る、夫れを如来様が傳へて下さつたので、喩へて云ふと蠟燭に火をつける様なもので、蠟燭には可燃性と云つて燃える性質を持つて居るが、唯此まゝにして置ては燃えない、燐寸の火をチヨット附けると今度は燐寸を離れても蠟燭は自然に光明を放つ、それと同じことで、如来様が御戒法を傳へると云ふは別に設けた物をお傳へ下さるのでなく、如来様は燐寸の様なもので夫を吾々の心に火を附けて下さる、吾々の信仰の力に依て心に在る天然の徳が輝いて来る、御戒法は心の寶である、吾れは元來佛に變らない寶を具へて居る今日其働さ

が現はるゝのである、お互は天然自然に佛の境界であると云ふとが自覺せられる、さうすれば吾々は今日より佛様の仕事をせんければならぬ、佛様の仕事とは何であるかと云ふと發願利生です。

發願利生といふのは一切衆生を助け様といふ願を發して衆生を利益するをいふのです、吾々は生れ替り死に替りしても一切衆生の爲めに盡くしてゆきたいといふ誓願を起す、夫が發願利生である、今日では之が最も大事である、西洋の個人主義なんと云ふ事に青年の人々が若し心酔してしまつてはいけない、尤も獨立の精神は持たなければならぬ、日本は忠孝主義の國であるから、日本國民は何所までも國家の爲め親の爲め先祖の爲め更に進んでは社會の爲めに盡すと云ふ考をもつて、總ての事業の根本としてゆかんければならぬ、之が發願利生である。

行持報恩といふは互が道徳を身に行つてゆくが行持である、どんなに學問が出来ても實踐道徳と云ふとが出来なかつたならば所謂論語讀みの論語知らずである、支那の元の太宗皇帝の時代に胡石塘と云ふ大學者があつた、自分は大學者であるに依て何う

か高官になりたいたいと常に思つて居ると、天子様より召出しになつたから、愈々今日自分が立身をする日であるに依て衣冠等も新調し、成るべく風采を飾つて重く用ゐられたいと云ふ考から餘り心配をして宮中に於て天子様にお目に掛ると、餘り自分が立派にしたいと心配した爲めに冠が歪んでしまつたのも氣がつかかなかつた、それで自分には眞直ぐな積りであるから恭しく天子様の前に出ると、夫を見たる太宗皇帝が「卿は何等の學を修むるや」と問はれた、すると胡石塘は「治國平天下の學を修む」と答へた、私は天下を治め國家を治むる學問を致しましたと云ふ、其時天子様は大にお笑ひになつて仰せらるゝに「自己の身すら之を正する能はず如何に況んや天下國家を治めんをや」と自分の被つて居る冠さへも眞直に被ふれぬ者が何うして天下國家を治めるとが出来やうぞ、自分の一身が治まらぬ位で中々人を治むるとはできぬと云はれた、それであるから吾々が自分の一身を治め自分の職分を盡すが行持である、此務めを嚴重に守つて夫れを以て有らゆる御恩に報すべきである、其等の恩を要約して佛法では四恩と云ふ、第一は國王の恩、即ち 天皇陛下の御恩、第二は父母

の恩、第三は衆生の恩、即ち社會の恩、第四は三寶の恩、即ち佛法僧の三つの恩、之を四恩と云ふのです、平重盛が父の清盛に御意見をした時に、世の中に四つの御恩がある、その中に於ても天子様の御恩が一番尊い、然るに天子様の詔に背く様な事をなされては貴公は逆賊の譏は免れませんからと云て面を冒して諫言をしたとがある、佛敎では日々の行ひが直ぐに報恩にならねばならぬから、學問をするのも國の爲め親の爲め、財産をつくるのも 天皇陛下の御爲め社會の爲め佛様の御爲めである、各々職業に勉強してゆくそれが佛法では御恩報謝と現はれてくる、此行持報恩といふとは無邊際である、生き替り死に替りといふ覺悟を以てゆかねばならぬ、此御恩報謝が圓滿に行はれたならば、金銭でも買はれない楽しみが出てくる、夫が眞の極樂です、極樂とは何か美味でも食べて寝て居るが極樂かと思ふ人もあるがそれは一時的の極樂である、一日働いて居て夜分に休むから極樂です、あれも食べよ之れも食べよと云つたら仲々骨が折れる、本當の極樂とは何所迄も親の爲め國家の爲めに勤めて其勤めが一人人道に契ひ道徳に契ふてゆくが眞の極樂である、六月の炎天に汗膏を絞つて働く其

所には云ふに云はれない楽しみが現はれてくる、以上述べましたのが曹洞宗の四大原則と云ふのである。

受戒入位

此四大原則の中に於て受戒入位と云ふが我宗安心の土臺となる、佛様に成るには先づ戒法を受けるのである、其戒法は第一には佛法僧の三寶に御歸依をする、第二に誓願を起す、誓つて悪い事はしませす、誓て善い事は行ふ、誓て社會人類を救ふと云ふ大誓願を起す、其志を現はすには何うすれば宜いかと云ふと此行持門の十箇條になる、之を禪戒と云ふ、禪的に坐禪の悟の上から戒法の話をする、非常に氣高い所謂哲學的道徳で、人世を飛び超えた絶對待の上からして萬事差別界に應用して道徳を行つてゆくと云ふ御戒法である、その理論をお話して居ると六ヶ敷て却て解らなくなつてしまふから大體について御話をする。

護生行

第一 護生行(不殺生)、戒法の名目では不殺生戒である、生物を殺すなといふことです、之を行ふ點から云ふと護生行です、他の生命を守つてゆく、東京あたりでは動物愛護會と云ふが出来て居ります、亞米利加杯では動物虐待禁止會と云ふのがある、誓

官が出張して訓戒をする、動物を虐待する位な人は其心が段々増長すると後には人間を虐待しても少しも可愛想だと云ふ様な心も無くなり極冷酷な人を造る様になる、それであるから人間は云ふに及ばず鳥畜類迄も無益な殺生を爲さないが護生行である、世の中は人間と動物とに關らず命に優る實は無い、戦争に出るのは其最上の實を投げ出すのであるから軍人は最も名譽ある位地に立つて居るのである、獨り軍人ばかりで無く教育家は教育の爲めに斃れ、官員さんは官職の爲めに斃れる、職務の爲めに死を遂げるは皆名譽の死である併し吾々は職務の爲めに斃れる者は少い、或る所に命よりも金が欲しい今五千圓位の金があれば有つたら死んでも遺憾は無いと云つて居る者が有つた、夫を聞いた或る金持の旦那さんがお前は五千圓の金と命と取替へたいと云ふが茲に銀行の切手で五千圓あるから之れと引替に命を此方へ渡すか、但し命を取る事は一週間だけ延期をしてやるが一週間の後には屹度お前の命を貰ふぞ、有り難うございませと云つて五千圓の切手を持って玄關口迄出掛けて考へた、ハテ今俄に五千圓の旦那さんに成るとはなつたが此金を何うしやうか、酒をウンと飲んでみても仲々五千圓の金

を使ふ譯にはゆかぬ、衣服を買ふても一週間の後に死ぬるものならさう澤山に要りやうも無し、人に呉れてやらうかそれでは貰はぬも同じになる、愈々一週間の後には死なねばならぬ、それではつまらぬと思ふたから、引き返して旦那さん先刻は有り難うございました、チット訂正致します、何う訂正する、金は半金だけで宜しうございませから其代りに何うか半殺しに願ひますと云つたと云ふとです、人には命を惜むと云ふ欲があればこそ衛生法も發達する、危きにも近よらぬ、それから色々元氣が出て来る、命が惜しいと云ふ欲は人間活動の源である、佛法では其欲を捨てよとは申さぬ、嘗に自分が長壽をするばかりでない人間は無論一切衆生の生命を愛護してゆかねばならぬ、茲に一家庭に不和があるとする、嫁さんに對して姑殿が非常に八釜しく云ふ、其所で勤めるともならず里方へ歸られもせず、日々針の筵に坐つて居る様な氣持がする、其爲めに病氣して死ぬる、是等は刃物を用ひず手も掛けないで嫁を殺すことになる、又老人が病氣をして居る、若い人達は碌々看病もせず、厄介な者だと思ふて老人を粗末にする、老人の方では例へば三十日も生きるものでも十日にして死ぬ

知足行

る、さう云ふ事は看病が不親切な結果として刀劔を用ゐずして間接に親を殺すことになる、道徳上に於ては最も重い所の罪である、之に反して親切に看病でも致して十日間生きるものならば十五日も生きる様に運んでゆくを護生行と云ひます。

第二 知足行（不偷盜）之は足る事を知れと云ふ行ひです、例へば一升這入るものは矢張り一升だけしか這入らぬ、一合だけ這入るものなら一合だけしか這入らぬ、自分は一合だけ這入る物に生れて來たならばそれで満足させねばならぬ、併し人は器械と違つて勉強の力に依ては三合入りが一升入りにも一斗入りにもなる、人は何んと云つても現在の境遇を顧みて足る事を知るが知足行と云ふ、自分は貧乏人であるが金持にはなれないかと云ふにそうではない、貧乏人ならば尙更のと假令ひ麥飯の粗末な物を食べても今日丈はそれで満足して將來は御馳走を食べられる身の上に成る様に勉強をする、それが反對になると寢て居つて自分一人の懐をこやすと云ふ、それが社會の盗人です、商賣をするにも十錢に賣るべき物を十一錢に賣れば既に盗人です、儲けてゐて仕事をせねば一日の給金の盗人、自分の職を怠ればそれに對する報酬の盗人です

貞操行

況んや他人の物を盗むは大なる罪です。

第三 貞操行（不邪姪）貞操とは品行を慎む事である、日本では貞と云事は女には使ひますが、男子にみさと云ふ語は餘り用ゐませんが、實は男女に拘らず一夫一婦と云ふ事を守つて、婦は夫を愛し夫は婦を愛し、男女の間に於て嚴格なる規律を守つてゆくが貞操である、日本に於てナゼ男子に貞操を入釜しく云はぬかと云ふと血統相續と云ふ事を重んずるからである、若し妻たる人に子供が無い時は夫婦相談の上に於て妾を置くと云ふ事が昔はあつた、今日でもあるでせう、所が他に妾を置く人にして眞實血統を重んずるといふ人は恐らく百人中に一人も見るとは六ヶしい、唯自分の道樂の爲めに妾を置く、さうして不義の快樂を食つてゆくと云ふ様な事があつた時は何うしても圓滿なる家庭を造くとは出來ないから邪姪をお誠にやつたのである。

第四 實語行（不妄語）虚妄な語を云はぬ、道理と實際に契つた言葉を使ふを實語といふ、道理と實際に背いたと云ふが妄語であります、「八百のうそを上手に並べてもまこと一つにかなはざりけり」人間萬事虚言の世の中と云ふ具合で虚言が原因と成

實語行

つて人を惑す、正直の頭に神宿ると云ふ、昔の歌に「正直の頭に神が宿るなら宿なし神がたんとあるらん」とあるが實に正直の人に神様が宿ると云へば今日の世の中には宿なし神様が澤山あるて有りませう、それでは社會が亂れるから之を慎みて頂きたいのです。

第五 明慧行（不沽酒）之は酒を誡められたもので、酒を飲んで精神を亂してはならぬ、元來飲食をするのは吾々の身體を養ふ爲めである、飲食の爲めに體を傷ひ精神を亂しては飲食の目的に反するのである、飲み物食べ物は云ふに及ばず見る物聞く物の上に於ても吾々の智慧を明にしてゆけよと云ふが明慧行である、楠正成公の誠に「酒を飲むとも吞まるゝな」とある如く顛倒心と云つて貴い物も賤しくなつたりするは酒の上の一つの作用である、或所に酒飲みのお父さんと息子さんが在つた、お父さんも、お酒に酔ふて居る所へ、息子さんも酒に酔つて歸つて來て、お父さん唯今歸りましたと云ふが親父は息子の顔が本當に見えないから、貴様は誰だ、（子）私はお前さんの忤だ、（親父）ナニそんな頭の幾つもある忤をもつたとはないそんな化者みたやうな頭

の澤山ある忤は勘當をすると云ふと、息子が勘當して呉れるのは仕合せだ、居れと云つたつて居れるものか、こんなグラ／＼する家に居れるものかと云つたと云ふ話がある。酒の爲めに智慧が暗くなつてしまふ、殊に酒は世の中の風儀上に非常に害を興へるものだ、依て酒は節して酒の爲めに亂心狂氣の行ひは誓て仕ないと云ふ精神を持ちたいものである、併し酒は飲まないでも物に酔ふ人がある、碁將棋に酔ふ、芝居や相撲に酔うて居る人もある、是等も一種の娛樂であるから或程度迄は差問はなからうがそれに迷ひ込んでではならぬ、かねて精神が確乎りして居らぬ時は見る物聞く物が悉くお互の心を迷はす所の誘惑物になる、併し其誘惑物の眞つた中に在て少しも迷はされぬと云ふが明慧行であります。

第六 愛語行（不説過）人の過ちを説くな、悪口を云ふな、愛語とは優しい親切な言葉を信長公の前に持て行くと、信長公はハツタと睨み附けて、貴様の様な小僧の爲めにどんなに乃公に苦勞をさせた、ザマ見ろと云つて足に掛けて蹴飛ばした、今度は徳川

家康公の所へ持てゆくと、家康公は勝頼の首を見て云はるゝには陣中の慣ひとは云ひ乍らかゝる姿になるとは家康に取つて甚だ心苦しく思ふ、今はの際に於てサソ御無念であつたらうが、之も因縁と諦めて成佛得脱して下されと云つてハラ／＼と涙を流した、夫れを見たる一般の人々は何うか家康公の如きお方に事へたいと申したと云ふとである、吾々も何うか優しい奇麗な言葉を使ひたいものであります。

第七 恭謙行（不自讃毀他）之は自分を讃めて人を毀ると云ふとをするな、縦ひ自分は立派な人物であつても人を輕蔑しない、頭を卑うするのが恭謙行である、自分にどれだけの技倆があつても、高慢心があつてはならぬ、高慢心は自分の身を削る劍である、結構な衣服を着てゐても貴公は大層立派な物を用ゐて居なさるといはれた時、さうてす是は頗る上等ですなんと云つたならば最早其物の價値は無くなる、貴公は美事なお方であるといはれても何う致しまして私にはさう云ふ考はありませぬと云ふ所に有り難味が備はるのである、古句に「下がる程人は見あぐる藤の花」

第八 布施行（不慳法財）布施とは施しのことであるが施す物に財法の二がある、財

は物質上の施し病氣をしてゐる者には藥を與へ、お腹の空いた者には御飯を食へさすと云ふ様な事が財の施しである、法は人の精神に向て施すのであるから、内に苦しみのある人には法を施して安樂ならしめ、又學問の有る人は教育をして道を人に教へる信仰の有る人は其信仰を人に傳へる、さうして物を施して惜しい心があつてはならぬ惜むと云ふとは同情の念が薄くて自分さへ好ければよいと云ふ考であるが必ずさういふ量見を離れて出來得る限りは自分の物を節して他人に分つて與へるやうにせねばならぬのである。

第九 安忍行（不瞋恚）之は堪忍を守つて腹を立てるなと云ふ方である「堪忍のなる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが堪忍」、之は鳩翁と云ふ心學者の口癖である、岡山の殿様が鳩翁をお召しになつた、鳩翁先生は禮服を付けて登城をしたが、朝の八時頃である、所がいつ迄待つても殿様が目通りをさして下さらぬ、到頭朝の八時頃より午後三四時頃迄待つた、鳩翁先生足は痛くなる體は疲れる大に困つた、漸くにしてお目通りをして見ると、殿様は酒筵の眞最中である、鳩翁先生ムットしたが、向ふが殿様

だから仕方がない、(殿) 大きに待ち遠うであつたらう、今日は幸ひに酒筵を開いて居る。一盃飲む様にと云はれた(翁)失禮ながら私は無調法で一盃も頂戴は出来ませぬ、(侍士)アレ御老人御殿様が折角下さつた酒を(翁)イヤ私は戴けませぬ(女中)一盃我慢してあがりなされと女中杯がカラカイ半分に勧める、後には顔色を替えて先生ポント立ち上つて(翁)私はお酒の御相手に今日は上つたのでは有りませぬ自分の主張して居る心學のお話を聞きたいと仰しやるから今朝上りましたが、一日待たして置いて今御目通りをすると嫌ひな酒を無理に御勧めになるそれでは今日は歸つて又出直して御目通りを致しますと云ふと女中の一人が一寸目配せをすると大勢の女中が聲を揃へて「堪忍のなる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが堪忍」と詠みました、之は鳩翁先生が平常能く云ふ歌であるから之を聞いたる鳩翁先生が之は一つ計られたか耻づかしいとであると思つから私は誠に申譯が有りませぬ、酒は戴きませぬが何うか御勘辨を願ひますと、殿様にお断りをしたと云ふ話がある。

正信行

第十 正信行(不謗三寶) 佛法僧に御歸依をした以上は三寶に反對するな、信仰は正

しき信仰を得よ、今日の常識に背かない信仰でなければならぬ、世の中の道理に契ふた信仰でなければならぬ、尤も信仰は絶対界の佛様を信ずるのであるから、吾々人間の理窟以上にとまつてゆくのである、併し道理に背いては正しき信仰とは申されない信仰は吾々の目にも見えず耳にも聞えないといふ佛様の御慈悲の徳を信じてゆく、例へば人は見て居なくても佛様が見なされると常に自分に注意して佛様の光明を信じてゆくのである、併し世の中の道理に背き道徳に背いた信仰は所謂迷信である、往々世間にある事ですが、忌々しいあの人を祈り殺すなんと云ふ、斯んな信仰は駄目です、向ふが悪人であれば益々之を憐んでゆかねばならぬ、然るに何うかすると神佛の力を借りて向ふの人に災難がある様に命を縮めやうと云ふ考を起したり、或は此世ははかないから未來へ早く行かうと云ふ量見を起す人もある、中には悪い事をして置いて夫れを分らない様にと神佛を信仰する人もある、勉強をせないで立派な者になりたいとか家業に精を出さずして身代をよくしやうと云ふ、即ち原因結果の道理に背いたものならば皆な迷信である、それであるから吾々は世の中の一般の智識に反對せず、一般

の道徳に背かず、寧ろ信仰の力に依て益々日本の國民道徳を進めてゆくと云ふ信仰で無ければならぬ、之を正信仰といふ、平常それを誤れば佛様に反對する事になる佛様に不孝をするな之が不謗三寶戒であります。

以上十通りの戒法を目標とすれば互の體の振舞ひ言葉の使ひ方心の覺悟は自ら佛の御心に契ひ世の仁義道徳にも契ふ、其時は互の體は金城鐵壁である、「人は城、人は石垣、人は塀、情は味方、仇は敵なり」日本の國民が城なり軍艦である、加藤清正は勇士にして且つ義の固い人て在つた、太閤殿下の様子を見ると千の利休を御相手にして茶の湯杯をおやりになる、今少しの隙があれば謀反でも起さうと云ふ甚だ穩かならざる天下の形勢であるのに悠々と茶を呑んで居る様では天下の政治が行はれない、之れは千の利休なんと云ふ要らざる茶人が居るからである、忌々しい、國家の爲めに利休を殺してやらうと思ふて、或日千の利休の所へ尋ねて行つた、此方は珍客さんであるから(利休)マアよう御出て下さつた、(清正)今日は茶を一つ頂戴致したといつて狭い茶席へ大小を持つて這入らうとすると、(利休)モシ、御覽の通り茶

席は四疊半のことで手狭く有りますから大小は別室に置いて無腰で御這入り下されと云ふと加藤清正が怪しからん事を仰しやる貴公はいつも茶を飲んで居るから解らんかもし知れんが刀は武士の魂である、其魂を外に置いて來いとは怪しからんとである魂を捨て、お茶を飲むと云ふ事は此清正は出来ませんと云つて、自ら憤怒の相が現はれて居る、千の利休は心の落着いた人である此人の詠んだ歌に「寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心無ければ苦しみもなし」人間は此通り精神が大丈夫に成らねばならぬ、其位の先生であるから、清正が怒つたのを見て、イヤお腹立は御尤もである、然らば魂を持つてお這入りなさいと云ふ、身丈七尺に近いと云ふ男が大小を提げて這入つたら茶席一ぱいになつた、千の利休は釜の蓋を取り茶碗を取つて、さう丁寧な事は無論しないで極簡易な儀式に依てお茶を立て、清正に進ぜやうと云ふので、柄杓に湯を汲んで此方へ運ばうとするトタンに誤つてであるか柄杓の湯を爐の中へ溢した、火の起つて居る所であるから狭い茶席一面に灰神樂が起つた、何うも驚いた加藤清正は其所等中震動する様な音をさして板場を踏み鳴らして隣座敷へ逃げてしまつた、千の利休

は之ば失敬千萬申譯がござらぬ、切腹して御申譯をせねばならぬ、折角の珍客が御
 來臨であるに意外の失禮を致しました、偏に御容赦を願ひたいと云つたが、自分の腰か
 ら下はチットモ動かぬ、扇子で灰を拂ひながら、加藤氏貴殿の大切な魂迄も灰だら
 けになつた、(清正が餘り急いで逃げたから大小を忘れたのである)之れは私の手で
 御掃除をしてあげやうかと云ふ言中に響があつた、加藤清正は元來正直な人であるか
 ら其所に於て奮然として悟つた、之れは態と灰神樂をして乃公をやり込めたわい、
 乃公が刀は武士の魂であるとして云つて窘めたが先刻以來利休の態度を見るに少しも身
 體に隙が無い、茶釜を執ると恰も槍の様になつて見える、釜の蓋は柵の様になつて見
 えて切り込まうと思ふても切り込む隙が無い、さうしてお負けに灰だらけにして外へ
 追出した、茶は飲んでゐても精神は何所迄も沈着いて武士道を乃公に示したと思つて
 加藤恐入つて利休老人今迄刀が魂だと云つたがそれは未だ私の云ふた事は淺薄で
 あつた、武士の魂と云ふものは刀に非ず又槍に非ず、吾々の胸三寸の内に鍛え込ん
 だる忠義の二字之が眞の魂であると云ふ事が解つた、先生は人が悪い、斯んな事をし

て私をやり込めた、併し大に清正迷ふてゐた、貴公が茶を飲んでゐるから深く決心す
 る所が有て參つたが、能く見ると姿は茶であるが、其實英雄豪傑の精神を養つてゆく
 所がある、清正始めて茶の妙味を味ひましたと云つて、今度は兩人が日の暮るゝのを
 忘れて話をして其後は非常に親しい間柄と成つたと云ふ事です、今日の吾々も其通り
 鉄鎌を取らうが算盤を取らうが銘々家業に従事してゆく其儘に天地の眞理を現はして
 ゆかねばならぬ、戒法と云ふ道德の根元を心にシカト刻み込んで、今日の身體がソツ
 クリ佛様と成る、之を禪門で云ふと即心是佛の境界である、さうなると一口の言葉の
 中にも悟りがあつて、然うしてお慈悲がある、足を動したならば足の上にも悟りが現
 はれ、手を挙げたならば手の上にも慈悲の徳が現はれる、コウ軀全體が天地の道に
 契つてゆくと云ふ所で始めて佛法を吾々の軀に具へる所謂佛の體、佛の心を得たもの
 と云ふ事が出来る、人生の目的人道の基礎と云ふものが茲に於て始めて確乎不拔にな
 る、吾々が智徳、斷徳、恩徳といふ三つの徳を圓成するは此御戒法が土臺となる、依
 て禪を行へば戒を具へてゆく、戒を守つてゆけば自ら禪の妙味に契ふ事になる、戒

と定とは其處に於て同一體となる、是れが曹洞宗に於ける禪戒の説明になつて居ります、お話は未だ不充分であるが先づ大體だけを盡した積りであります。

曹洞宗義大綱終

明治四十五年五月廿八日印刷
明治四十五年六月三日發行

曹洞宗義大綱奥附
定價金參拾錢

不許複製

發行所

編輯兼發行人 今村延雄

印刷人 太田音次郎

印刷所 秀英舍

東京市芝區露月町十八番地

鴻盟社

振替東京貳九七九
電話芝貳千廿七

鴻盟社發行書籍要目

大内青巒居士著 (上卷四版 下卷三版)
碧巖集講話

洋定送 裝價料 全金 二四六 冊圓錢

汗牛充棟も奇ならざる禪學書中に於て第一位を占むるものは碧巖集也しかも唯その提唱の孤奇峻峭にして文章の俚麗富瞻なる人多く之を解するに苦しむ大内居士深く之を遺憾とし文字章句の意義典據を明にし俗談平話の中に禪學の妙味を發揮し一讀人をして手の舞ひ足の蹈む處を知らざらしむ眞に是れ痛絶快絶を極めたる古今唯一の快著

加藤咄堂先生著 (増訂再版)
大乘起信論講話

全定送 價料 一金 壹八 冊圓錢

五千餘卷の經論の精髓八萬四千の法門の要旨は擧げて起信論に在り眞如の妙體を論じては佛教哲學の根柢を穿ち生滅流轉の相を説きては微を悉くし細を穿ち信仰と道德とを談じては實踐の道程を示し殊に通俗平易の筆を以て最新の科學哲學を参照して講述せられたるものなれば起信論の妙旨を知ると共に最近の思想に通ずることを得べし猶ほ再版に際し本文全部の和譯を添ふ

永興經豪禪師著
正法眼藏御抄

全定送 價料 二金 五拾 冊圓錢

是れ世に所謂「經豪抄」「影室抄」なるものにして豊後泉福寺の影室に深く秘藏せられて容易に拜覽を許されずたまへ世に二三の寫本あるも魯魚烏焉の誤り多きは辨を要せざる所仍りて泉福山主深く之を遺憾とし秘庫を開て之を印行せらる眞に是れ眼藏研究の羅針盤にして高祖道の妙味字句の間に溢る

支那 寂照和尚撰

大藏法數

全定送 價料 二金四冊 四十二圓

「大藏經」中にも收めざる佛教大辭典は非常の喝采を博せり常に酷評の名ある『萬朝報』すら之を評して曰く
賢首諸乘法數翻譯名義集等は坊間其書に乏しからず、而して寂照の大藏法數は其の卷帙浩濶にして流布多からざるを以て極めて得難しとす、佛教の研究漸やく盛んなるに及ばば此種辭書體の者、必須缺くべからざる所と爲る、鴻照社が二年の歳月を費して二冊に縮刻するは其の學人に惠すること多とすべきに足る其の校正の嚴、印刷の精、之を座右に備へて、典故の搜索に便せんか、舊刻に過ぐるあるも決して及ばざることなし

來馬琢道師編著 (三版將盡)

叢林禪門寶鑑

定 價 特上並送 製製製料 壹金壹金各 圓壹圓壹金 拾參壹金 錢拾參壹金

禪宗は儀式に於て他門に勝れ法語に於て他宗に誇り諸堂に於て各宗に超越し佛教史上に注意せられたる宗派なり然るに従來の法式其他は大抵は口傳によりて相承せられ舊叢林の指導を待たざれば何等の行動も出來ざりき著者之を遺憾とし四年の歳月を費し洞濟碩學の門を叩き數百部の禪籍を涉獵して遂に本書を成す法語あり公案あり問答あり行式あり回向あり宣疏あり法式考あり佛像式あり眞に是れ禪門の百科辭典

新井石禪老師 (三版將盡)

修證義說教軌範

全定送 價料 壹金壹圓 冊廿八錢

本書は曹洞宗安心起行の標準たる修證義に就て老師が説教の模範を示されたるものにして叮嚀懇切なる教理の説明あり巧妙適切なる譬喩感話あり感奮興改惡遷善せしむべき古今の實例あり更に三十一節各節に適切なる經說祖訓詩歌俳諧等を附して實地應用の便を與ふ布教家は教壇上の好師友となすべく檀信徒は老師の膝下に在りて本證妙修の眞髓を聴くの感あるべし

大内青巒居士著 (五版)

禪學三要素

全定送 價料 壹金壹圓 冊拾四錢

片言隻語直に宇宙人生の眞相を喝破し人間處世の妙諦を提示するは禪學の特色也而して之に關する書汗牛充棟も音ならざるも最もその要を得たるものを參同契寶鏡三昧五位説の三篇とす今や大内居士例の妙辯快舌を以て之を講述せらる痛絶又快絶

大内青巒居士著

普勸坐禪儀講話

全定送 價料 壹金壹圓 冊廿四錢

普勸坐禪儀は道元禪師開宗劈頭の撰述にして坐禪の威儀作法よりその根本原理に至る迄説き盡さざるなし大内居士例の通俗平易の筆を以て一字一句の意義典故より禪學の根本原理に至る迄講述して詳細を極め如何なる初學者と雖も一讀の下に禪學の妙味を味はふことを得せしむ

弘津説三師編

承陽大師聖教全集

全定送 價料 三金壹圓 冊參四錢

禪は宇宙の原理也禪は諸學の秘奥也禪は佛教の總府也本書は日本佛教界の聖者曹洞宗開祖永平寺道元禪師一代の教典を編輯せし禪學の一大聖典也政治家軍人教育家實業家其他經國經世の志士一たび之を閲讀せば霧海に南針を得て自然に安心立命を得るのみならず社會及國家を裨益すると洪大ならむ
●本書內容九十五卷▲大師小傳▲(漢文)普勸坐禪儀一卷▲(和文)正法眼藏九卷▲(漢文)永平廣錄十卷▲(附錄)學道用心集一卷▲(漢文)永平清規二卷▲(漢文)永平廣錄十卷▲(附錄)漢文)實慶記一卷▲(和歌)傘松道誄一卷▲(和文)正法眼藏附記六卷▲(和文)光明藏三昧一卷▲(和文)曹洞教會修證發願卷▲合計十種二百十八卷

弘津説三師編

承陽大師御傳記

全 定價 送金料
一 冊 廿五錢
一 冊 廿四錢

日本佛教各宗派の祖師四十餘人ありと雖も其學殖の深遠見地の高明其道業の卓絶其胎範の洪大なる蓋曹洞宗の開祖承陽大師を其巨擘となすと世間既に定論たり然るに各宗派の祖師には從來既に完全なる傳記ありて而て獨り承陽大師には之なき三師壯時より之を慨嘆し多年の間刻々苦行記述の紀實の材料を蒐集して從前坊間に流布する建勳記世當時の國家の紀實の材料を更に一頭地を抜ききて第一に大師弘教傳道の本領を發揮し第三に大師の形勢を寫し第二に大師弘教傳道の本領を發揮し第三に大師の宗體宗風を顯彰し第四に大師弘教傳道の本領を發揮し第三に大師の渾身所なく叙事精密議論公明文章平生易加ふるに振假名を附せり苟くも大師の流れを汲む者は其緒流なるを將た在家たるを得ん論なく此傳記に依り始めて大師海岳の法恩を知るとを得ん論らず一本を購ひ朝夕披閱して大師に親炙せられよ

慈雲律師遺著

金剛經講解

全 定價 送金料
一 冊 十四錢
一 冊 十四錢

本書は日本の小釋迦たる慈雲尊者の遺著にしてその類を絶し群を抜く尊者の見識は能く本經の神髓を發揮して遺憾無く眞に字々光明を放つの感あり加ふるに辭句平易懇切にして何人にも解し易く尊者の老婆親切は楮間に溢る

西有穆山禪師著

坐禪儀提耳錄

全 定價 送金料
一 冊 參拾錢
一 冊 參拾錢

普勸坐禪儀は承陽大師開宗立教劈頭の御撰述にして深く佛祖正傳の妙旨を述べ具に參禪學道の要訣を示して言々悉く是れ佛祖の皮肉骨髓句々總べて是禪門の金科玉條ならざるはなし故穆山禪師本書を實參實究すること八十餘年非凡の道力と縱横の妙舌とを以て高祖大師の肝膽を穿ち來りて曹洞禪の妙味を提示せらる老婆徹惻の訓誡は人をして感奮興起せしめ精透の見先哲未發の言は往々にして讀者を驚絶せしむるものあらん

西有穆山禪師著

學用心集提耳錄

全 定價 送金料
一 冊 五拾錢
一 冊 五拾錢

學道用心集十章先づ筆を無常觀に起し參禪の用意學道の正邪等より遂に直下承當に及び實參實究の徑路身心決擇の要旨述べて盡さるなし而して禪師の御提唱たる古人今人の邪解異説を評破し直に高祖大師の肝膽を剔出し來りて片言隻語痛快を極む曹洞禪の特色高祖道の妙味を知らんと欲するものは本書を繕け

大内青巒居士著 (四版)

六方禮經講話

全 定價 送金料
一 冊 貳拾五錢
一 冊 貳拾四錢

今や思想界の亂調は普通の倫理道德を以ては到底救済の効なく進んで宗教的倫理を要請するの機運に到達せり而して此の宗教的倫理の要領を提示したるものは本書是れなりされば世の布教傳道に従事するの士は勿論苟も佛教倫理の何物たるかを知らんと欲する諸士に取りては最良最善の指導者たるべし

峯 玄光師編 (四版)

永平悟由法話集

全 定價 送金料
一 冊 五拾六錢
一 冊 五拾六錢

現代佛教界の巨人たる性海慈船禪師の法話を蒐録す記する所のもの片言隻語悉く是れ禪學の蘊奧高祖道の妙味にして親しく膝下に在りて提撕を受くるの感あるべし加ふるに禪師最近の肖像筆蹟傳等を以てす禪學の蘊奧を究めんと欲するもの高祖道の妙味を知らんと欲するもの偉大なる人格の感化を受けんと欲するものは本書を繕け更に明治聖代の大政治家たる伊藤公府の信仰及び公の禪師によりて如何なる感化教導を受けしかに至りては唯獨り本書の詳にする所なり

大内青巒居士著
般若心經講要

全定送 價料
冊一金 廿四 錢

佛教八萬四千の法門を收めて二百六十二字に單め宇宙の神秘天地の妙用説て到らざる無く人心の源底信仰の要義示して盡さざる無きは般若心經なり仍て大内先生古來賢哲の註疏解釋數十種中よりその粹を抜き華を集めて本書を成す透徹の見識博の識取捨宜しきを得て眞空妙有の深旨格間に活躍す

各宗大家分擔執筆
來馬 琢道師編纂 (三版)
通佛敎各宗綱要

全定送 價料
冊一圓 拾 錢

本書は各宗諸講師が最も親切に最も懇篤に各宗の宗義、歴史、判釋、經典等に付講説せられたるものにて、加ふるに編者が非常の苦心に依り、佛敎の地位、佛敎發達史、分類法、佛敎の大意、佛敎の典籍、佛敎の現勢等に關する研究の結果を附説し、實に佛敎全書の名を擅にすべき良書なり往年一たび刊行するや大に各宗學者學生佛敎研究者の間に歡迎せられ、數々各宗學校に於ける參考書又は教科用書として採用せられ、今時運に盛み各講師に就て詳密の校訂を経、更に年表、索引等を附して、讀者の便利を謀り殆んど佛敎大辭典の如き感あらむ今や斷片的佛敎の出づるに際し此の統一佛敎各宗綱要の出づるありて眞摯なる研究者の爲めに多大の利益を與へんこと弊社の務に信じて疑はざる所なり殊に其解説の法たる専ら通俗を旨とし、本を購讀して本書の眞價を知りたまはんことを

吉村雄鳳師編 (三版)
因緣百話

全定送 價料
冊一圓 拾 錢

譬喻因緣は人の理性と感情とを以て二つながら満足せしむるに堪えたるものならざるべからず此の見地より從來世に流布せる幾多の同書類を見るに往らに其數多きに似たるも其の實を具ふるもの世だ妙し編者大に之を遺憾とし多年經驗の結果あらゆる階級の聽衆より湧くが如き歡迎を受けたる譬喻若くは因緣を蒐集して極力聽衆に感動を與ふる様に書き下し因緣譬喻に關聯せる經典祖語を引證す眞に布敎の大資料家庭の好讀物

來馬琢道師著 (訂正三版)
日本佛敎史 各宗高僧傳

全定送 價料
冊一圓 拾 錢

「本朝高僧傳」「元亨釋書」等は古來有名の日本高僧傳なれ共漢文にして了解し難く且宗見によりて取捨されたり著者之を憾とし嚮して日本佛敎史上に就き高僧の列傳を輯め時代を追ひて之を記述し一時佛敎研究上好評に上れり今や再版既に盡きたるに依り更に増補訂正して第三版の發行す本書の特色は如左▲佛敎傳來より現代に至る千三百年間の歴史中より各宗開祖は勿論荷くも人に知られし百餘高僧を洩さず詳録したること▲全篇假名交り文にして何人にも通讀し得(難字に傍訓あり)▲一貫せる佛敎史上より正しく記述したれば時代と高僧との關係を知ると▲著者は獨に「通俗佛敎各宗綱要」(紙數八百餘頁)を編纂せるとして各宗の教義歴史に精通し居れば其宗旨の人より見るも當違ひの非難絶無なる▲出來得る限り無稽の文字を去り群書を涉獵して正確の事實のみを載せ批評的に説述して而も上人法師等の稱呼に敬意を失はず▲年表は嶄新なる工夫を以て編輯されれば本書を讀むれば日本佛敎の變遷を一目の下に知る

峯 玄光師著 (四版)
ボケツ 形註 修 證 義

全定送 價料
冊一圓 拾 錢

修證義は曹洞宗道俗の日常懐にしボケツトにすべきものなるも從來の折本にては現代の官吏軍人學生等智識ある階級の趣味に適せず仍りて之をボケツト形とし叮嚀懇切なる註釋を施し本文註釋共にふりがなを附し携帶し便すると共にその意義を了解せしむ高等施本として將た講習會等の講本として最も適當なり

忽滑谷快天師著 (四版)
禪學批判論

全定送 價料
冊一圓 拾 錢

本書は先づ大別して三部とし第一部原理論に於て禪の原理を論じて最近東西の哲學に考證し第二部倫理論に於て所有學理學説を捕へ來りて其正邪を批判し最近進歩せる倫理學説と禪との致非を質して禪の道徳を明かにし第三部宇宙及人生論に入りて宇宙の實相如何、人生の意義、進化の法則等の論證をなし斯る宇宙に介在せる人類は如何に處世の方法を講ずべきか即禪的處世論は先人未嘗の大文字となる

水野靈牛師著

西國卅三所 觀音靈場 御詠歌說教

全定送 價金料 一冊 十六錢

日本宗教界信仰の對象の大半は觀音菩薩にあり本書は御詠歌を 養題として觀音靈場の緣起を説き菩薩の妙智力を述べ更に巧妙 なる譬喩因縁を擧げて法話の模範を示さる

境野黃洋先生著 (訂正再版)

日本佛教小史

全定送 價金料 一冊 十七錢

佛教我國に傳來してより茲に一千三百年各宗各派の開創傳來あ り高僧碩徳の崇行偉蹟あり皇室貴顯の御尊崇あり偉人哲士の參 學修道あり複雑なる政教相關の事實ありその薫化は國民思想の 中樞に浸潤しその餘韻は工藝美術文學風俗あらゆる方面に影響 す本書燃犀の史眼簡明の筆鋒を以て屈曲せる行路複雑せる關係 を叙述して明快忠實且つ各宗派の開祖各時代の代表的高僧の寫 眞版廿餘箇を附す

大内青巒居士著

謠曲禪話

全定送 價金料 一冊 拾貳錢

謠曲は日本文學の粹にしてまた最も禪味の豊富なるものなり本 書は彼の一休禪師の作なる『山姥』の一曲に就て居士が該博の識 趣味ある筆を以て縱横に講解し大乘佛教の極致と禪學の妙味と を俗談平話の中に説盡して餘蘊なく一讀の下人をして別天地に 逍遙するの感あらしむ

梶川乾堂師著 (三版)

俱舍論大綱

全定送 價金料 一冊 十六錢

阿毘達磨俱舍論は小乗佛教の代表的述作にして『唯識三年俱舍 八年』と稱して之が多大の歲月を費したるも今や必修の學藝日 に益々多きを加ふるを以て昔日の如くなるを得ず茲に於て著者 深奥なる學識と多年教授上の實驗とを以て本書を公にす簡明の 文巧妙なる圖解能く俱舍論三十卷の要目精髓を説盡して餘蘊無 く一讀の下に小乗佛教の宇宙觀人生觀倫理觀靈魂論等は勿論高 妙なる大乘佛教の根本基礎の那邊にあるかを了知すべく殊に目 下教界の一大陷缺たる各宗中學等が教科書として最も適當なる を信す

梶川乾堂師著 (再版)

唯識論大綱

全定送 價金料 一冊 十六錢

本書は簡明の筆能く『成唯識論』の要目精髓を發揮し唯識中道の 妙理賴耶緣起の深義五位百法の分類五重唯識の觀法斷惑證理の 行位等は勿論此に關聯せる幾多の重要教義は最も秩序的に最も 組織的に記述せられ佛教各宗中學の教科書として眞に空前の好 著と云ふべくまた學佛初入の士に取りては闇室に孤燈を得るの ある感べし

加藤咄堂先生著

修養清話

全定送 價金料 一冊 十五錢

本書は咄堂居士が博學強記の資を以て廣く古徳先賢の法語話説 を引きて精神修養を説き加ふるに自己の所信を以てし紛々擾々 たる人生別に安心の地あるべきを示し古來の高僧哲士、英雄、 偉人名匠烈婦の修養談二百八十を擧げ黄金其前にあるも以て節 を變ぜざるの品性と白刃三尺頭上に下るも從容笑て死に就く底 の膽力とを養成せしめむとす文章流麗趣味津津々以て志を立つべ く以て心を養ふべし若し夫れ探て布教の材とするあらむか更に 妙なり

加藤咄堂先生著
婦女の修養

全定送料
一冊 金卅四錢

御婦人方が日常に讀むて其の心を養ふべき教訓を簡単に言文一致を以て書き綴り、處女たること、細君たること、母たることを問はず、婦人として心得べき精神修養のこと、若くは面白く説きて古今數百の節婦烈女の美談を擧げ且つ著者獨得の見地を以て茶湯、生花、和歌、俳諧に至る迄悉くこれ婦女の修養に資すべきものとして趣味ある筆を以て示されたれば家庭の讀本として此上なき好著なり、殊に家庭教育の必要なるお伽噺の嶄新なるものを收めたれば婦人は勿論男子亦一本を藏すべきものなり

吉村雄鳳師著
觀音經說教

全定送料
一冊 金壹圓二錢

本經は實に是れ大聖釋尊の暖皮肉にして、又菩薩の活骨髓なり著者茲に其皮肉骨髓を解剖して本書を成す。本書は實に著者が熱烈なる信仰と、獨得なる筆舌とより成る。本書は菊版三百五十頁に亘る大説教にして行文談話體總て振假名を附したる、總ククロス洋裝の頗ぶる美本なり。本書は觀音經の全文を二十席に分ちて賛題となし、各席に古今の聖言金句を引證し、助くるに嶄新なる比喩及び因縁譚を以てせり、加之、勉めて材料を豊かにし、極めて變化に富ましめたるを以て、何人たりとも即座に信解し得るは勿論、讀んで解意を催すなく、聴いて怠屈を生ずるなし、以て布教家の好参考たるべく、信者の良師友たるべし、幸に一冊を購ふて菩薩の慈眼に觸れよ

吉村雄鳳師著
新案過去世帖

全上並送
製製料
金壹圓
一冊 拾貳錢

過去世の種類に多しと雖も何れも皆實用に過ぎず弊社に新案に成れる各宗共通の實用的過去世の榮を賜はらん事を其體裁内容左の如し
○新案過去世帖は幅二寸六分長さ五寸八分の折本にして用紙は最上の厚紙を用ひたれば翻轉に頗る便なり○新案過去世帖は順次戒名及俗名等シツクリ列記し得るやうに區劃を定められたる、同向の際見易くして且つ徒らに未頁まで翻轉するの繁雜なき、同時に又裏面に日割の欄をも設けたれば日々位牌代用として祭祀する事を得る一舉兩得の考案に基けり○一新案過去世帖は正確なる年代表を附したれば過去世帖中の精盤が幾後幾年を経過せしや一目瞭然たり故に年回繰出しには實に便益限りなし

傳道

▲定價送料共一ヶ月金貳錢六ヶ月分金十二錢一ヶ年前金廿四錢壹百部以上は特別割引す▲本誌は通佛敎主義にして高尚幽遠なる敎理を極めて俗談平話の中に何人にも了解せしめん事を期す▲本誌は毎號大内青櫛前田慧雲村上專精井上圓了加藤咄堂新井石禪忽滑谷快天峯玄光等諸大家の講話を掲載す▲本誌は菊版、六頁全文總ふりかな附にして普通の新聞紙を讀得る人には何人にも解せらるべし▲本誌は僧侶諸師には演說講話の参考として最も必要に在俗諸君には佛敎の何物たるかを知る唯一の捷徑たるべし▲本誌は毎號一冊讀切の講話を掲載すれば各法要敎會等の施本に最も適當なり

護法

▲定價送料共一ヶ月分金七錢五厘六ヶ月分前金四十貳錢一ヶ月分前金八十錢
▲本誌は曹洞宗の敎義を中心としたる布教雜誌なり
▲本誌は毎號大内青櫛新井石禪加藤咄堂忽滑谷快天峯玄光等諸大家の講話を掲載す
▲本誌は全國數百種の新開雜誌に掲載せられたる重要なる記事を摘録し本誌一冊によりて數百種の新開雜誌を講讀すると全一の効果と與ふ
▲本誌は毎號數頁に亘る大内青櫛居士の『維摩經講話』を掲載す蓋し敎界唯一

村上專精博士著

佛教講論集

定價一圓五十錢
小包料十二錢

藏海和尚著

正法眼藏私記會本

定價二圓
小包料二十四錢

黃泉和尚著

正法眼藏涉典續貂

定價六圓
小包料二十四錢

禪宗辭典

林象器箋

定價一圓
小包料二十五錢

栗山泰音師著

嶽山史論

定價一圓三十錢
送料十二錢

孤峰智琛師著

日本禪宗史要

定價六十錢
小包料八十錢

正法眼藏

和語梯關邪訣

定價三十錢
送料四十錢

正法眼藏

道心卷
三時業卷
歸依三寶卷

私記
定價二十五錢
送料十二錢

正法眼藏行持卷私記
定價二十錢
送料四錢

五位顯訣元字脚
定價四十五錢
送料四錢

曹洞五位顯訣
定價三十錢
送料四錢

禪學寶典
定價十一圓
小包料十二錢

佛敎大意
定價十五錢
送料十二錢

大內青精居士著

佛敎

大意

定價十五錢
送料十二錢

現代名家

最新佛敎演說軌範

定價五十錢
送料六錢

來馬

珠道師編

禪學活問答

定價三十錢
送料六十錢

大內青精居士著

戊申詔書衍義

定價十五錢
送料二十五錢

新井石禪老師著

曹洞宗要法話

定價三十錢
送料四錢

大內青精居士著

心地觀經報恩品講義

定價七十錢
小包料八十錢

荒木磯天著

仙術

定價三十錢
送料六十錢

新撰四節引導抄

法名字撰附
定價四十錢
送料四十錢

大內青精居士著

修證義綱要

定價三十錢
送料四十錢

西有禪師著

禪戒抄講話

定價七十錢
小包料八十錢

鷲尾順敬著

禪宗史要

定價十五錢
送料二十五錢

雲照律師著

天覽いろはの義解

定價十五錢
送料四錢

大內青精居士著

修證義聞解

定價二十五錢
送料四錢

空華談叢
定價三十錢
送料四錢

町元吞空師著

冠註無門關

定價五十錢
送料四錢

訂校維摩經日講左券

定價八十五錢
小包料八錢

黑田眞洞師著

標註八宗綱要

定價三十五錢
送料六錢

諸經要集

定價八十五錢
送料六錢

諷經錦囊

定價九拾五錢
送料金六錢
上製壹圓參拾錢
送料金八錢

瀧谷琢宗禪師著

修證義筌蹄

定價十五錢
送料四錢

西山師著

金剛經聞解

定價四十錢
送料四錢

西有禪話

定價三十五錢
送料六錢

選擇集講義

定價一圓五十錢
小包料十二錢

信心銘夜塘水講義

定價七十錢
送料八錢

法華經八卷

定價六十錢
送料六錢

勝鬘經

定價十五錢
送料四錢

維摩經

定價二十錢
送料四錢

天台四教儀

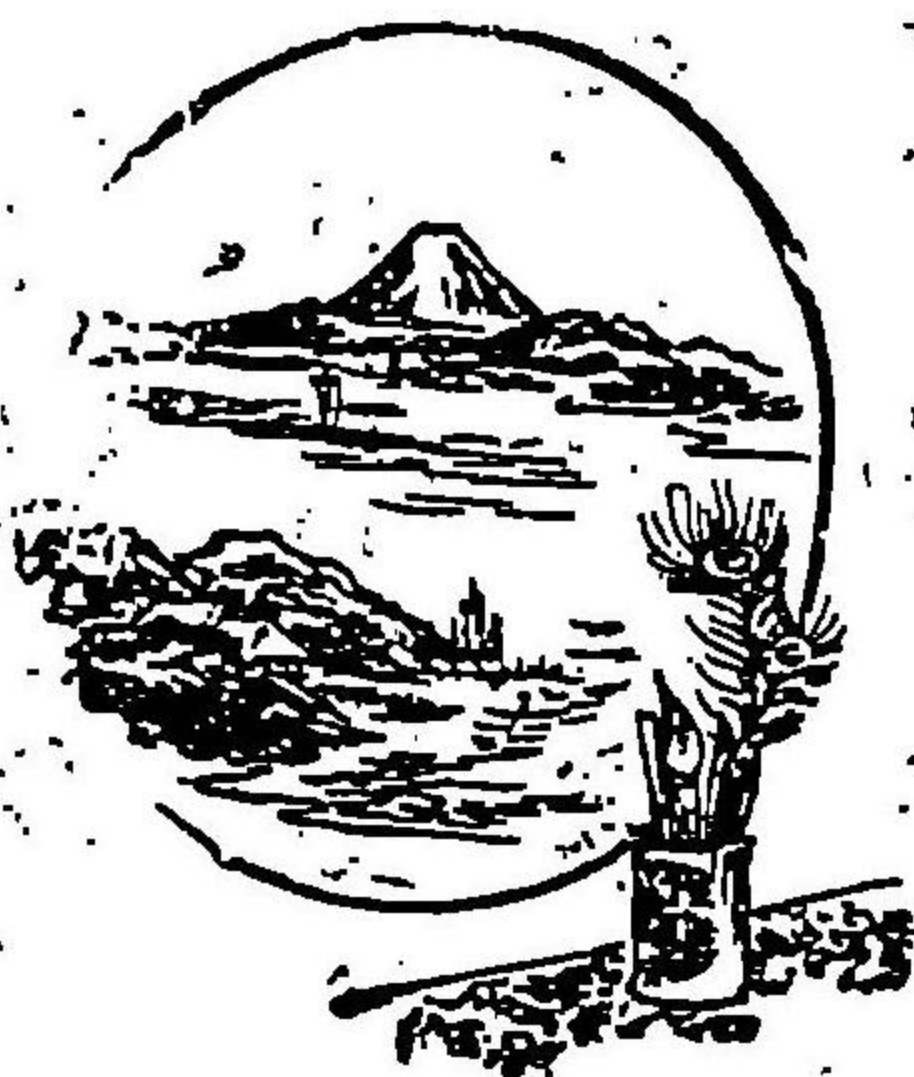
定價二十錢
送料二錢

發行所 東京市芝區露月町

十四

信心銘拈提落草談 定價六十錢
送料八錢

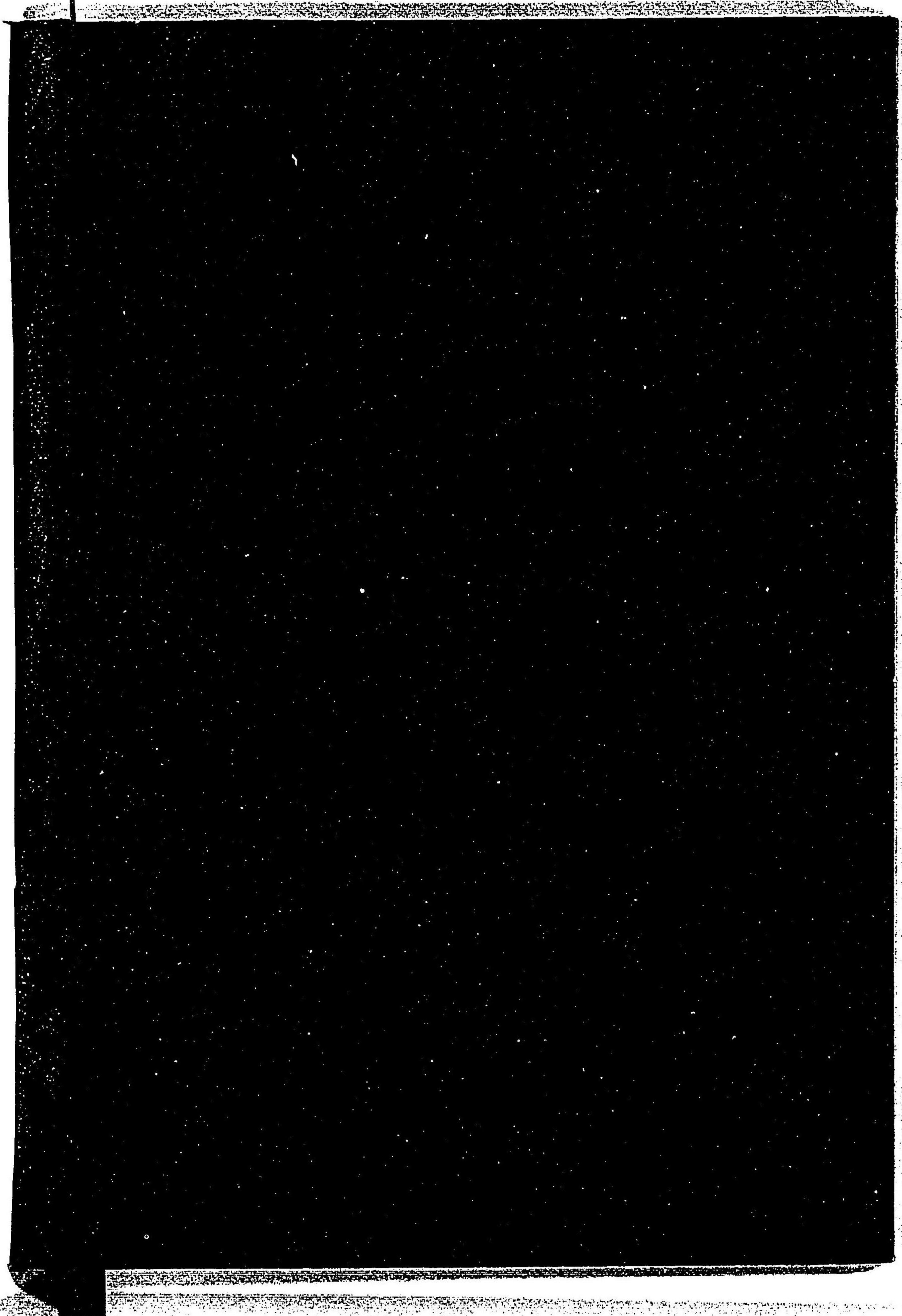
坐禪用心記落草談 定價三十錢
送料六錢



振替東京貳九七九
電話芝區千廿七

鴻盟社

325
156



325
156

019675-000-4

325-156

曹洞宗義大綱

新井 石禪 / 著

M45.6

ABG-0467



